



914.6
A123
2b(4)7



始



914.6
A123
26(1)
⑦



の日記

阿部次郎著



三太郎の正統

三太郎の正統

自序

此類の書は序文なしに出版せらる可き性質のものではない。自分は自分の過去のために、小さい墓を建ててやるやうな心持で此書を編輯した。自分は自分の心から愛し且つ心から憎んでゐる過去のために、墓誌を書いてやりたい心持で一杯になつてゐる。

此書に集めた數十篇の文章は明治四十一年から大正三年正月に至るまで、凡そ六年間に亘る自分の内面生活の最も直接な記録である。之を内容的に云へば、舊著「影と聲」の後を承けた彷徨の時代から——人生と自己とに對して素樸な信頼を失つた疑惑の時代から、少くも此信頼を恢復し得るやうになつた今日に至るまでの、小さい開展の記録である。自分は自分の悲哀から、憂愁から、希望から、失望から、自信から、羞恥から、憤激から、愛から、寂寥から、苦痛から促されて此等の文章を書いた。全體を通じて殆んど斷翰零墨のみであるが、如何なる斷翰零墨もその時々の内生の思出を伴つてゐないものはない。固より外面的に見れば、此等の文章の殆んど凡ては最も平俗な意味に於ける何等かの社會的動機に動かされて書いたものである。經濟上の必要や、友人

の新聞雜誌記者に對する好意や、他人の依頼を斷りきれない自分の心弱さなどは、外から自分を動かして、此等の文章を書くための筆を握らせた。併し此等の外面的機縁は自分の文章の内容を規定する力を殆んど全く持つてゐなかつた。自分は此等の外面的、社會的必要に應ずるために、常に内面的衝動の充實を待つてゐた。さうして内面的衝動の充實を待つて始めて筆を執つた。従つて自分は屢々經濟上の窮乏を忍んだり、締切の日に後れて他人に迷惑をかけたなり、口約束ばかりで半年も一年も引張つて置いたりしなければならなかつた。此等の文章は外面的機縁によつて火を導かれたが、外面的動機を以て爆發したものではない。固より此等の文章は悉く内面に蓄積する心熱の苦しさ、に推し出されたものだ。云ふのは誇張である。併し書くに足る程の内面的成熟を待つて之を記録した。云ふだけの権利は、自分に許されてゐる。信じてゐる。自分は此等の文章がまだまだ熱さ力さに缺けてゐることを熟知してゐる。併し、その時々、自分の人格に許された限りの誠實を盡して、此等の文章を書いた。云ふことだけは憚らない。

さは云へ、誠實の深さも亦人格の深さも始終する。自分は從來に於ける自分の文章を貫く誠實が、甚だ軽く軽いものなことを思ふ時、そゞろに冷汗の流れることを覺える。回想すれば、事物の

真相に透徹せむとする誠實も淺かつた。自分の生活を深く、穿ち行かむとする誠實も亦淺かつた。——從來、自分は比較的論理的客觀的思考の力に富んだ者、世間から許されてゐるやうな氣がしてゐた。さうして自分も亦深い反省なしに、茫漠として此評價を受納れてゐた。然るに、その實、自分の思想は、現在利那の内面的要求のみ基礎として、事物の一面にのみ穿貫し行く部分觀に過ぎないものが甚だ多かつた。さうして自分は自分の内面的要求が特にその阻遏さるゝ點に於いて燃え立つことを經驗した。従つて自分は常に自分の要求を阻遏する一面にのみ極度に強い光を投げて、自然と人生と自己とを觀じて來た。自分の思想は、自然に就いても、人生に就いても、自己に就いても、靜かに深い客觀性を缺いた少年の厭世主義が主調をなしてゐた。而も此厭世主義を自己に適用するに當つて、自分は解剖の一面のみに熱して、開展に向ふ努力の一面を忘れ勝であつた。自分は自分の解剖が穿貫の力を缺いてゐることは今でも思つてゐない。さうして現在と雖も、真相の凝視、解剖、並びに嫌厭を、無意味にして呪ふ可き事だとは少しも思はない。併し自分の人格は、何と云つても解剖の一面に停滞して、靜かなる包容と、根強き局面開展の力を缺いて居た。自分は過去の自分を回顧する時、此點に於いて自分が憎くて恥かしくてたまらな

い。殊に自分は今自分の内生が徐々として轉向しつつあることを感じてゐる。従つて過去の自分に對する愛着は、次第に冷淡と憎惡とに變化しつつあることを感じてゐる。自分は今此變化し行く心を以て過去の文章を見る。さうして自ら生み、自ら育てて來た此等の小さい者に對して、流石に愛憐の情に堪へない。自分の此書を編輯することゝは、捨てる子のためにその安息の處を——その墓を準備してやる母親のことゝである。

併し此の如き未練愛着のことゝは、舊稿を編輯する理由にはなつても、之を公表する理由にはならない。自分は何の權利があつて、敢て此書を公表するのであるか。自分の信する處では、自分は二ヶ條の理由によつて此權利を享受する資格がやうである。自分は此二ヶ條の理由によつて、此書の出版が現在の思想界に對して多少裨補する處ある可きを信じてゐる。

第一に此書に輯められたる文章には未熟、不徹底、其他あらゆる缺點あるに拘らず、眞理を愛することゝ、眞理を愛するがために矛盾缺陷暗黒の一面をもたじろかずに正視せむとする精神は全篇を一貫して變らないと信する。此書の大部分を占めてゐる内容は、自分の矛盾と缺乏とに對する觀照である。従つて自分は此觀照の記録によつて他人のことゝを温め清めることが出來

ることゝは思つてゐない。此書は恐くは讀者を不愉快にし、陰氣にする書に相違あるまい。併し自分は自分の文章が徒らに、理由なくして、他人を不愉快にし、陰氣にすることは信じてゐない。讀者が此書によつて陰氣になり不愉快になるならば、それは陰氣になり不愉快になることが、讀者その人の必ず一度は經過しなければならぬ必然だからである。自分はその人を往く可き處に往かすため、之を不愉快にし陰氣にすることを恐れない。矛盾を正視すること、矛盾の上を輕易に滑ること戒めることは、凡ての人を第一歩に於いて正路に就かせる所以である。此書を貫く根本精神が多少なりとも生きてゐるならば、讀者の胸中に、矛盾を正視しながら、而も其中に活路を求むるの勇氣を鼓吹する點に於いて、幾分の裨補がない譯はないと思ふ。

第二に此書は單純なる矛盾と暗黒との觀照ではない。同時に暗黒に在つて光明を求める者の叫である。さうして又、實際、暗黒から少しづつ光明に向つて動きつつある心の記録でもある。固より自分の心は覺障の多い心である。僅に一步を進めるためにも、猶除かなければならぬ千の障礙がある。自分は千鈞の覺障を後にひいて、人生の道を牛歩する下根の者である。此六年の日子を費して自分の歩いた道は恐くは一寸にも當らないであらう。併し、兎に角に、自分の内生は此

間に多少の開展を経て来た。自分は道草を喰ひながら、ごうごう廻りをしながら、迷ひながら、躓きながら、ごうごうにかして此處まで歩いて来た。その間の勞苦は、自分にまつて決して小さいものではなかつた。假令個々の部分を形成する思想内容には見るに足るものが極めて少いにしても、此小なる開展の跡を貫く微かなる必然は、神と人との前に全然無意義なものではあるまい。自分が此書を編むに際して経験する心持は、必ずしも羞恥の情のみではないのである。

自分は此小さい経験の報告が、それ／＼の道を進みつゝある現代の諸友に、多少なりとも参考になるやうに切望してゐる。自分は過去に對する未練と愛着とによつて此書を編んだ。願くは之が同時に、現在並に將來の思想界を幾分なりとも裨補するの書ともならむことを。

大正三年二月十一日

谷中の寓居にて

阿部次郎

凡例

一、配列の順序は大體年代順によつた。年代順に讀んで貰ふ外に、讀んで貰ひ方が全然ないと思つたからである。願くは小さい魂の開展の跡を見る積で此書を讀んで頂きたい。もし一部分だけ讀んでやめて了ふ氣ならば、何卒三太郎の日記の後半だけを讀んで頂きたい。前に書いたものだけを讀んでやめてしまはれては堪らない。自分は此事を親切なる讀者に切望する。否「切望」だけでは此心持を盡すに足りない。「哀願」と云ひ直さう。

二、三太郎の日記の後に入れた數篇の小説や對話や論文は三太郎の日記の後半よりも古いものである。その積りで讀んでいただきたい。

三、書肆の注文によつて、附録にゴッホの、こゝを書いた二篇の文章を添へた。自分の小さい、醜い内生を讀者の前に披瀝したあとで、讀者の心を明るくするために、自分の尊敬する一人の人の事を語るのも無用ではあるまい。

四、自分には過去に芽を吹いた色々の問題の中で、始末がつかずにあるものが山程もある。本書

の讀者は、三太郎の新しい轉向が今漸く始つたばかりで、過去の影が山のやうに黒く彼を脅してゐることを見るであらう。自分は今此苦しみの豫想に生きてゐる。さうして此苦しみを樂みにしてゐる。

断 片

青田三太郎は机の上に頬杖をついて二時間許り外を眺めてゐた。そうして思出した様に机の抽斗の奥を探つて三年振に其日記を取出した。三太郎の心持が水の上に滴した石油の様に散つて了つて、俺はかう考へてゐる、俺はかう感じてゐると云ふ言葉さへ、素朴なる確信の響を傳へ得ぬ様になつてからもう三年になる。彼は其間、書くとは内にあるものを外に出すことに非ずして、寧ろペンと紙との相談づくで空しき姿を隨處に製造することだと考へて來た。日記の上をサラ／＼と走るペンのあとか

ら、「嘘吐け、嘘吐け」と云ふ囁が雀を追ふ鷹の様に羽音をさせて追掛
來るのを覺えた。三太郎は其聲の道理千萬なのが堪らなかつた。解
のを本體とする現在の心持を、纏つた姿あるが如くに日記帳の上に摺
して、暗中に模索する自己を訛傳する、後日の證據を残す様なことは、ふ
つつり思ひ切らうと決心した。そうして三年の間雲の如く變幻浮動する
心の姿を眺め暮した。併し三年の後にも三太郎の心は寂しく空しかつた。
此空しく寂しい心は彼を驅つて又古い日記帳を取出させた。とりこめの
ない此頃の心持をせめては型の細かな洋紙の上に寫し出して、半は製造
し半は解剖して見たならば、少しは世界がはつきりして來はしまいか
ど、果敢ない望が不圖胸の上に影を差したのである。日記帳の傍には三年

前のインキの痕を秩序もなく残した白い吸取紙が、春の日の薄明りに稍
卵色を帯びて見えてゐる。三太郎は碁盤に割つた細かな型の上に、細く
小さくペンを走らせて行く。

「生活は生活を咬み、生命は生命を蝕ふ。俺の生活は湯の煮へたぎら
鐵瓶の蓋の上に、あるかなきかに積る塵埃である。其底に生命が充溢
し、狂熱が沸騰してゐると云ふ意味ではない。俺の心は唯常に動搖し
てゐる。動搖を豫期する念々の不安は現在の靜安をも徒に脅迫してゐ
る。一皮を剥いた下には赤く爛れた様々の心が、終夜の宴の終局を告
ぐる疲れたる亂舞に狂ひ回つてゐる。重ねて云へば、俺の生活は芝居
の波である。波の底には離れぐになつた心が、下廻りらしい乏しさ

を以つて、目的もなく唯藻掻いてゐる。この動亂こそ我が生存の唯一の徴候である。其處には純一なる生命もなく、一貫せる主義もなく、従つて又眞の生活もない。俺の生活は既に失はれた。俺は今眼を失へるフォルキユスの娘達の様に、黄昏れる荒野の中に自らの眼球を捜し廻つてゐる。

俺は古の心美しき人達の歌に聲を合せる——俺にも昔は眞正の生活があつた。幼き日は全心に沁み渡る恐怖と悲哀と寂寞と、歡喜と争心と親愛との間に過ぎた。俺は子供として又人として、無花果の嫩葉が延びる様に純一無雜に生きて來た。俺の心は一方にスクスクと延びて行く命であつた、一方には又靜かに爽かなる鏡であつた。命が傷いて鏡

が曇つて、茲に動亂を本體とする現在が來る。明日になつては命が枯れるか鏡が碎けるか、現在の俺には何事も解らない。唯俺には満足し得ざる現在がある、現在に満足せざる焦燥がある。

尤も、猥雜によつて心の命を傷けらる可き俺の運命は早くも幼年時代に萌してゐた。俺の幼い心には後年の教育と經驗とによりて蹂躪せらる可き空想の世界が早くより其種を卸してゐた。俺は羅馬舊教の傳説中に養はれた祖母に育てられて、北國の山村に成長した。山村の夜はどりわけ寂しく靜かであつた。此寂しく靜かなる山村の夜々に、桃太郎カチカチ山の昔噺と共に俺の心に吹込まれたものは天國煉獄地獄の話であつた。俺は幼心に自らの未來を推想して、到底直ちに天國に登

るを許さる可き善人だとは自信し得なかつた。俺は地獄と煉獄との間に懸る自分の魂に、成年の感じ得ざる新鮮なる恐怖を感じてゐた。特に最氣懸りなのは、煉獄の長い修煉により、罪の淨めも了へて天國に送られる際に、苛責の血に汚れたる手足を洗ふ可き水の流れのあるなしであつた。俺は夜中に眼を醒して此事を思出すと堪らなかつた。そうして傍に眠てゐる祖母を搖起しては、よく泣き乍ら此問題の解答を求めたものであつた。死の恐怖と死後の想像とは幼年時代から少年時代にかけて久しく俺の生活の寂しく暗い一面を塗つてゐた。思ひ出すは十一二の時分に遭遇した大地震である。俺は母や弟妹と共に裂けて外れた雨戸から外に這出した。時は雨が上つて空がまだ曇つてゐる秋の

夕暮であつた。素足に踏む土は冷く、又ジメジメしてゐた。火を失したのであらう、遠くの村々の焼ける炎は曇つた空に物凄く映つた。大地の底は沸騰した大釜の様にゴォゴォ唸つてゐた。そうして湯氣を噴出する口を求めて釜の蓋をゆるがす様に、數分の間を置いては大地を震はしてゐた。俺は此中に立つて、今犇々と胸にこたへる死の恐怖に比すれば、平日の念頭に上る死の壓迫などは丸で比較にならぬと思つたことを記憶してゐる。此の如き反省が直に念頭に上る迄に、死は當時の自分を威嚇してゐたのである——併し心の生命が傷くと共に死の恐怖も亦其新鮮なる姿を失つた。俺は今死を恐れない、少くとも死の恐怖が現在の俺を支配してゐない。今の若さで、それ程迄に俺の生の色は

褪めて了つた。それ程迄に俺の心は疲れ萎びて了つた。

兎に角羅馬舊教の世界は、周囲の雰圍氣によつて養成された自分の世界に、兩立し難き異彩を點綴したる最初であつた。爾來幾多の世界は別々の戸口を通して俺の頭腦の中に侵入して來た。其或者は俺の心に作用して從來知らざりし歡喜と悲哀とを教へた。其或者は俺の理解を強制して瘤の如く俺の頭の一角に固着した。此等の種々の世界は俺の心の中で、俺の頭の中で、若くは俺の心と俺の頭とに相對壘して、相互に覇權を争つてゐる。俺の生命は多岐に疲れて漸く其純一を失つて來た。過度の包攝は俺の心の生命を傷けた。

俺の心の世界では一つの表象フォルシテリングが他の無數の表象を伴ひ、一つの形

像が他の無數の形像を伴つて來る。無數の表象と無數の形像とは相互に喧嘩口論をし乍らも、其手だけは源氏の白旗を握る小萬の手の如く緊乎と握り合ひつつ、座頭の行列の様に慘ましくおごけ乍ら無限に心の眼の前を通つて行く。一つの表象が中心となり、一つの形像が焦點となつて、他の意識内容は皆情調シテインムングの姿に於いて其背景を彩るのならば、何の論もない。凡てが表象と形像との姿を現して中心を争ふが故に、俺の心の世界には精神集注 Concentration と云ふ跪拜に價する恩寵が天降らない。俺の意識は唯罅もなく動亂するのみである。俺の Au Sich は苦しい夢の見通しである。

今あることとなければならぬこと、現に實現されたることと實現

を求むる力として現實の上に壓迫して來ること——約言すれば現實と理想との矛盾は、恐らくは精神と云ふ精神の必ず脱る可らざる状態であらう。此矛盾は健全なる自遜と努力とに導くのみであつて、何の悲觀する必要もない。併し俺の意識の中では現實と現實と、理想と理想とが相食んでゐる。様々の心持が海の怪の様に意識の中に戯れて、現に頭を擽げてゐる。「怪を認めて俺の現實を代表させ様とすれば、それちやア駄目だよと云つて思ひがけぬ處に他の一怪が頭を波の上に突き出す。午後の日が彼等の長い髪の上にきらめいて、波が怪しい波紋を織り出してゐる。其上に一つの理想は西から吹いて西から波濤を起して來る。一つの理想は北から吹いて北から波濤を起して來る。心の海

は今自らの姿に驚き呆れてゐる。

此の如くにして内界が分裂すると共に更に不思議なる現象が現れて來た。俺は自らあることに満足が出来なくなつた。現にあることゝあるを迫ることの執れをも含んで、兎に角自らあることに満足が出来なくなつた。俺は飢ゑたる者の如くに自ら知ることを求める様になつた。自らあることと自ら知ること——「ヘーゲルの言葉を藉りて云くば An Sich (本然) 乃 Für Sich (自覺) である。ヘーゲルの意味と俺の意味と全然相蓋ふてゐぬことは云ふ迄もない。先人の用語は唯俺に都合のよい内容を盛る爲の容れ物に過ぎない」——の對照は實に不思議なる宇宙の謎語である。自らあることは自ら知ると共に自らある

この内容を變更して來る。強き者は自らを強しと知ると共に多く驕傲と云ふ内容を得易い。單に強くありし者は其自覺と共に強く且つ驕れる者となつた。弱き者は自らを弱しと知ると共に謙遜と焦燥と努力との内容を得來る。單に弱きのみなりし者は弱きが爲に謙遜し焦燥し努力する者となつた。若し是が自ら知ると共に自らあることも亦複雑になり豊富になるに止るならば固より論はない。併し疑ふらくは自ら知ることには自らあることの純一に強盛に素樸に發動することを妨げると云ふ一般的傾向を持つてゐるらしい。若くは自らあることの爛熟と頹廢との隨伴現象として來ると云ふ一般的傾向を持つてゐるらしい。ヘーゲルは「ミネルヴの梟は夕暮に飛ぶ」と云つたと聞く。Für Sich

は An Sich を蠶食し陥没せしむるものと云ふことが事實ならば、而して此事實を評價する者が俺の様に An Sich の純粹と集中と無意儀とを崇拜する者ならば、其者の哲學は遂に Pessimismus ならざるを得まい。少くとも自覺と本然との矛盾に就いて深き悲哀なきを得まい。俺には此點に就いて大なる疑問がある。俺の心が此疑問の生きたる Illustration である。

併し自覺と本然との一般的關係はごうでもよい。兎に角 An Sich が生命の純一を失つて徒に動亂する魂なりとすれば、此魂の自覺は益々其悲哀を深くし、其矛盾を細密の點迄波及せしめ、其散漫を二重に三重に散漫にして、到底手も足も出し得ない者にする傾向あることは争ふ

を許さぬ。Für Sich は動亂する本然の情態を靜かなる智慧の鏡に映して觀照 Anzusehen を樂とする訣に行かない。俺の心は慟哭せむが爲に鏡に向ふ累かさねである。鏡中の姿を怖るるが故に再度三度重ねて鏡を手にする累である。反省も批評も自覺も凡て病である。中毒である。Sucht である。

散漫、不純、放蕩、薄弱、顛倒、狂亂、痴呆——其他凡ての惡名は皆俺の異名である。従つて俺は地獄に在つて天國を望む者の憧憬を以て無雜と純潔と貞操と本能とを崇拜する。嗚呼俺は男と大人との名に疲れた。女になりたい。子供になりたい。兎に角俺は俺でないものになりたい。——

併し此の如く生活を失へる者の歌、失へる生活を求むる者の歌を聲高らかに歌ふことは餘りに俺の身分に相應しくない。嚴密の意味に於て云へば俺は失へる生活を求むる心さへ既に失つてゐる。俺は心から求めたことがない男である。求めよ然らば與へられむと云ふ言葉の眞偽を實際に試したことはない男である。素直にして殊勝なるロマンテイケルは何時の間にか其姿を晦ました。フォルキユスの娘は今も猶隠れん坊の對手を捜す様に、其眼球を荒野の黄昏に捜し廻つてゐる。恐らく彼女は永久に眼球探しの遊戯をやめないであらう。處は荒野である。時は黄昏である。身は失明者である。捜されるものは失はれたる生活である。又何の缺けたることがあらう。彼女の眞實に求むる處は

唯此暗く悲しい氣分である。」

三太郎は此迄書いて来て急に筆をすてた。そうして憎さげに型の細かな洋紙の上に一瞥を投げた。「嘘吐け、嘘吐け」と云ふ囁が三年前と同じくサラサラと走るペンのあとから、雀を追ふ鷹の様に羽音をさせて追掛けて来た。三太郎は又ペンをとつて別の頁をあけた。

「俺の心の海にはまだまだ俺の知らぬ怪物が潜んでゐるらしい。俺の An Sich はまだ本當に Für Sich になつて居ない。俺は女の様な物云ひをした。俺はあつて欲しいことを皆否定の方に誇張してゐる。俺は人生に向つていやですよと云つてゐるのである。

兎に角日記は矢張り書く可らざるものであつた。書くこと云ふことは

An Sich が生きて動くこと云ふことではなかつた。Für Sich の鏡をキラキラと磨くと云ふことでもなかつた。唯指の先に涎をつけて、心の隅に積つた塵の上に、へへののもへじを書くことに過ぎなかつた。

結論は俺には何もわからないと云ふことである。

かう書いて三太郎は日記帳を再び抽斗の奥に投げ込んだ。そうして何時の間にか點いてゐる電燈を仰いで薄笑をした。遠くの方から蛙の聲が聞えて来る。

(明治四十五年四月二十三日夜)

三太郎の日記

一、痴者の歌

世の中に出来ない相談と云ふ事がある。到底如何にもすることが出来ぬと頭では承知し乍ら、情に於て之を思切るに忍びぬ未練がある場合に、人は自分の前に突立つ冷かな鐵壁に向つて出来ない相談を持ち掛け勝負なものである。出来ない相談を持ち掛ける心持は「痴」の一字で盡されてゐる程果敢ないものに違ひない。十年壁に面して涙を滾してゐた處で冷かな壁は一步でも道を開いて呉れ相にもない。實功の方面から云へば出来ない相談は無用なる精力の徒費である。唯出来ない相談を持ち掛けずに済む

心と之を持掛すにはゐられぬ心との間には拒む可らざる人格の相違がある。

實現を斷念した悲しき人格の發表——此處に「痴」の趣がある。痴人ではないければ知らぬ黄昏の天地がある。

2

我等には未來に對する樂しき希望がある。併し我等には又取返さねば立つてもかても堪らぬ程の口惜しい過去もないことはない。過去の因果が現在の心持にだにの様に食ひ込んで離れぬ場合も亦多からう。併し夢を食ふ猿でも過去を一舐にして消して呉れる力があらう筈もない。過去に向けられたる希望は凡て痴である。出來ない相談である。二十になつ

て漸く戀の心を悟つた藝者が、何も知らずに一本にして貰つた昔の事を考へて、取返しのつかぬ口惜しさに頬にかゝる後毛を噛み切つても、返らぬ昔は返らぬ昔である。血の涙でも昔を洗ひ去る譯に行かない。唯出來ない相談と知り乍ら又しても之を持掛けすにはゐられぬ心が誠の戀を知る證しにはなるのである。併し假令誠の戀を知る證しは立つても一旦受けた身と心とのしみは自然の世界では永恒にとれる期があるまい。焼け跡の灰は家にならない。焼け跡の灰は痴者の歌である。

3

自覺とは因果の連鎖の中にある一つの環が自ら第幾番目の環に當るかを悟ることである。自覺をしても因果の連鎖は切れない。因果を超越す

るものは唯「新生」である。嗚呼併し自然の世界の何處に新生があるか。新生とは限りなくなつかしく、限りなく恐ろしい言葉である。

4

因果の連鎖を辿り行く儘に吾人の世界には新しい眼界も開けやう。新しい歌も生れやう。併し其世界と其歌とは常に死靈の影が附纏つてゐる。天真とも離れ過去の渾然たる文明とも離れた吾人の世界は「新生の歌」が響くには餘りに微臭い。自分はせめて痴者の歌をきいて涙を流したいと思ふ。

(明治四十四年八月十四日)

二、ヘルメノフの言葉

1

余は獨立の人格である。故に余は獨自の思想を持つ。但し獨自の思想を持つとは其結合の状態、統一の方法が獨自の面目を呈露するの意味であつて、其要素が悉く獨得であると云ふ意味ではない。要素に於て悉く獨得なるは狂者の思想である、他人と全然交渉なき怪物である。要素に於て共通にして結合に於て獨自なればこそ余は友を持ち戀人を持つ。同時に余は余として人生の大道を行く。

余が獨自の思想を組織する要素は、一面には現代の徒と共通である。

一面には現代の徒と背いて古代の詩人哲學者と交感する。一面には現代と古代と共に超脱して獨得の閱歷に其根底を置く。余は独自の思想を詐りて苟くも安きを求むるの惡漢ではない。羊の皮を着て群羊の甘心を買ふの奸物ではない。余は独自の思想を有する事を標榜して憚らず人生の大道を行く。

余は憚らず人生の大道を行く。併し余は余が思想人格の全部を白日の下に晒して大道を濶歩することを恐れる。余は現代と矛盾する思想を發表するには細心なる辯解を附して前後左右を護衛する。重大なる損失を齎す可き思想は暫く裏んで之を胸裡に藏する。汝怯者よ、汝覆面して人生の大道を行く者よ。

余の知慧は二重の組織より成る。内面の生活を蒸餾して其精髓を蓄へるは一つの知慧である。此知慧を警護して蛇の如く怜しく外界との調和を計るは今一つの知慧である。自分には此第二の知慧が苦々しい。第二の知慧は第一の知慧を保護すると共に又之を蒼白にする。小兒の如く無邪氣に、白痴の如く無選擇に第一の知慧を放ちて世界を濶歩せしむる能はざるは、我が性格の弱きが故か、我が呼吸する雰圍氣の鉛の如く重きが故か。嗚呼我が魂よ、コホルトの如く躍れ跳れ。

2

赤兒を豺狼の群に投ずるは愚人の事である。汝の右と汝の左とには汝よりも遙かに巧みに自ら守る人多きを見よ、汝の蛇の知慧は寧ろ少きに

過ぎると一つの聲は云ふ。汝は汝の所持する物を公表するに時の利害を考量するに過ぎぬ。持たざるを保持りとし、持てるを保持らすとする虚偽に比すれば遙かに上品ぢやないかと今一つの聲が慰める。併し此二つの聲は世間に對する申譯の言葉とはなつても自分に對する申譯とはならない。苟も蛇の言葉を解することが余には堪へ難く苦々しいのである。

強者は自己の思想を外界に徹底せむが爲に發表の順序を考慮する。弱者は外界の壓迫を避けて靜に獨り往かむが爲に世間の鼻息を窺ふ。

3

自分にとつて興味ある對話の題目は唯自己と自己に屬するものである。併し此題目は他人にとつて死ぬ程退屈なものであらう。又他人にと

つて興味ある對話の題目は唯其人と其人に屬するものゝみである。併し他人にとつて興味ある對話は自分にとつて死ぬ程退屈なことである。故に吾人が他人と對話して非常に面白かつた場合には、自分の對手に與へた印象は甚だ悪かつたものと覺悟せねばならぬ。又對手に與る印象をよくする爲には吾人は非常な退屈を忍ばねばならぬ。兩者半々ならば其人の經驗は甚だ幸福なる經驗である……

レオバルヂは覺え帳にかう云ふ意味の言葉を書いた。此言葉を書いた時レオバルヂの唇には苦い、淋しい微笑が浮んだであらう。此苦い、淋しい微笑が此の如き蛇の言葉の生命である。處世の哲學を説く商業道德の講師の様に、ニコリともせず、此の如き言葉を發する者は一面に於て卑

俗である、一面に於て痴

4

薄明(Dimmerung)が事物を美化することは屢々云はれた。此事は其自身に美しい事物に關しては適用することが出来ない。印象派の畫家は強烈なる光の戯れを愛するが故に白日を擇ぶ。自然の風光は白日も美しく薄明も亦美しい。薄明は唯其自身に醜いものを美化する。薄明の美化は自然よりも寧ろ人生のことである。

自分の世界は呪はれたる世界である。我が意識の外に切り捨て、忘れ去り、葬り終るに非れば心の平安を保持し難き事柄が少からず眼前にウヨクしてゐる。従つて我が心には抽象(Abstraktion)の願切ならざるを

得ぬ。抽象の願切なる限り、醜き物、厭はしき物、煩しき物に弱き光を與へて、之を意識の微かなる邊に移して呉れる朦朧は嬉しい光である。

更に薄明は我が想像に活動の餘地、添補の餘地を與へる。余は朦朧なる事物を余自身に價值あるものとして創造する。此創造によりて事物の本質(Wesen)が浮んで來るか否かは明白でない。唯余自身の本質が薄明に乗じて對象に乗り移るの事實丈は疑はれぬ。従つて如何なる事物にも一定の光の下には美しく見ゆ可き條件が潜んでゐることも亦争はれぬ。抽象の意義は唯本質の榮えむが爲に雜草を刈り去る處にある。本質を逸したる抽象は無意義である。

闇中に見る女の眼は凡て大きく潤を帯びて見える。此大きく潤のある眼を通じて想像の手を女の肌に觸れる時、女の肉體は凡て美しい。後姿の

美しい女は其後姿が自分にとつては女の本質である。

嗚呼併し明るみの中に見むと欲するやみ難き要求よ。明るみの光に消え行く幻の悲哀よ。此悲哀に促されて更に辿り行く人生の薄明よ。

5

自分は未だインスピレーションと云ふものを知らない。併し今迄散ばつてゐた思想が次第に纏つて、水面に散點してゐた塵埃の渦巻に近くに従つて漸く密集し、歩調を整へて旋轉するが如き刹那の経験は決してないことはない。思惟の脈搏が歩一步に高まり、心のテンポが漸次に快速となるにつれて、肉體の上にも顔面の充血が感ぜられる。未だ鏡に向つて検査する機會を持たないが恐くは眼も潤ひ且つ輝いてゐやう。此時自

分の心はムツ痒いやうな苦しいやうな快感を覚える。

此状態は何時襲來するときまつてゐない。併し多くは讀書の後、安眠の後の散歩中に来る。自分は思想の湧く間散歩をつゞける。そうして前に湧いた思想が後に湧く思想に壓されて記憶の外に逸せむとする頃、急いで家に歸つて紙に向ふ。併し紙に向ふ迄には散佚して引汐の様にはひいて了ふ場合が多い。結論は形骸を頭の中にさめても新生の熱は冷灰となつて了ふ。偶々寫しとやめても讀み返して見れば下らぬことが多い。

自分が経験する思想の全湧は一尺ほれば湧いて來る雑水の様なものであらう。深く懸つて清冽なる純水に達する時の心持は自分にはわからな

感と苦痛とだけは知つてゐる。

6

夕焼の空が河を染めてゐる。河沿の途を大人と小供とが行く。「もう歸らうちやありませんか」と手をひいてゐる女が云ふ。「いやア、もつと行かうよ」と手をひかれてゐる小供が云ふ。疲れた親は活力に溢れた小供のアスピレーションに水をさす。活力に任する小供は疲れた親に同行を強ひる。親と子とが自然の愛によつて結合されたるはお互の因果である。親の手に絶る事なしに河沿の途を遠く／＼行く術を知らぬ小供のアスピレーションは運命の反語である。

夕焼の光は次第に消える。河筋は遠く白く闇の中に浮んで見える。河の面に霧が深くなる。

(四四、一一、二〇)

三、心の影

1

價値ある情調を伴つてこそ知識も、思想も、乃至情緒其物も始めて身に沁みる経験となる。全心の共鳴を惹起すこともなく、數知れぬ倍音と融け合つて根強い響を發することもなく、離れて鳴り離れて消ゆる思想や知識は餘りに乾枯びて、餘りに貧しい。明るみに輝く焦點の後には暗きに隠れ、薄明の中に見え隠れする背景がなければならぬ。一度鳴れば心の世界の隈々に反響を起して、消えての後も意識の底の國に餘韻永く響く様な知識と思想と情緒とが欲しい。一言にして盡せば心の世界に靈活な

るシンボリズムの流通を感じる生活がしたい。

併し情調の生活は往々にして思想と人格とを拒むの生活となる。現實の生活が餘りに複雑にして思想の單純に括り難いことを知るからである。自我の發動が餘りに移り氣に、變幻多様を極めて人格の不易に綜合し難いことを知るからである。昨日は何處に彷徨つてゐたやら、明日は如何なる國に漂ひ着くやら、此等は凡て知るを要せぬ、且知ることを得ぬ問題である。唯睡を焼くが如く明かなるは現在の生活と其情調とである。其時々的情調を噛みしめて、其時々共鳴を樂んで行くより外に吾人の生きる道がない。吾人の生活は刹那から刹那へとぼくと漂ひ流れて行く。

此の如く永久に刹那々々の情調を追つて行くのがロマンチズムならば世にロマンチズム程淋しいものはあるまい。情調の放蕩の外に此世に生きる道がないとしたら他人は知らず自分は耐らない。「昨日」に對する不信の意識も淋しく、「明日」に對する不安の意識も亦淋しい。依つて立ち依て安んずるに足る可きもの、若くは包んで温めて呉れるものがなかつたら自分の心は永久に不満である。自分の心の空は永久に曇天である。我心は漂泊し放蕩する情調を括る不易の或物に向つて喘いてゐる。之に觸れれば複雑にして移り氣な自我の全體が自然に響き出し躍り出す様な一つのキイノートに向つて喘いでゐる。嗚呼我が知らざる「我」は何處の空に彷徨つてゐることであらう。

聖オーガスチンは神の中に憩ふに非れば平安あることなしと云つた。自分は要求の點に於て未だ中世に彷徨つてゐる男であらう。思想が欲しい。人格が欲しい。「神」が欲しい。

2

要求を現實に化する根強い力を持つてゐる人にとつては或時を劃して天地が引繰返るに違ひない。或時期を境界として其生涯が著しい二つの色に染分られるに違ひない。併しノラと共に奇蹟を信ずることが出来なくなつた吾人にとつては、精神の如何なる昂揚もやがては引き去る可き満潮である。高潮に乗じて歡呼し熱狂する自我の背後には、冷かに檢温器の水銀を眺めてゐる第二の自我がある。「我身を共に襠の引纏ひ寄せとん

と寝て抱付縮寄せ」泣いてゐる美しい夕霧の後には、皺くちやな人形遣の手がまざぐと見えてゐる。此の如き二重意識の呪を受けた者の世界は光も暗である。狂熱も嘲笑である。悲壯も滑稽である。要するに一切がフモールである。

此フモールの世界に安住して、目新しいフモールの發見に得意になつてゐられる人は幸福である。自分には其背後に奇蹟の要求が覗いてゐる。其笑には「現象の悲哀」が籠らぬ譯に行かない。

3

一つの感情が旋律メロディをなして流れて行く文藝は固より美しいに違ひない。併し二重意識の洗禮を受けたる吾人は、様々の感情が即いたり離れ

たり調和したり反照したりしながら複雑な和聲^{ハーモニー}を拵へて行く文藝でなければ物足りない。抽象的な調和統一は如何でも構はぬ。多量のドイツナンスを交へた處に微妙なる情調の統一を保つて行けばそれでよいのである。自分一個の嗜好から云へば眞面目と巫山戯との中が割れて兩者が縋ひ交られて行く處に妙に遣瀨ない情調を喚起する、フモリスチツシユの作品は随分好きである。心の傷に手を觸れて身にこたへる苦しさを樂まうとする類であらう。

嘗て富士松加賀太夫の膝栗毛市子の段を聴いた。洒落と浮氣で世を渡る彌次郎兵衛が其洒落と浮氣で持切れなくなつて、悄氣で弱つて本氣になる所に、しんみりした、悲しい、遣瀨ないフモールがあつた。又嘗て菊

五郎の同じ膝栗毛赤阪の段を見た。併し其彌次郎兵衛は冥土の衢に彷徨つて、弱り切つて、本氣になつた彌次郎兵衛ではなかつた。踊り自慢の悪戯小僧が白張の提灯を被つて巫山戯てゐるとしか思はれなかつた。此場合^合に於てフモールの印象を與へると與へぬとは作の本質を捉へると捉へざるとの相違である。自分は菊五郎を有望だと思ふ丈に、其現在の傾向を追ふて慢心することを恐れる。菊五郎は一轉化しなければ唯鼻ツぱしの強い親分と、一通りの單純な滑稽の役者に過ぎない。悲壯と崇高とフモールとの役者になる爲にはもつと心^{こころ}の苦勞を積まねばならぬ。悲壯と崇高とフモールとを表現するに堪へざる俳優は吾人にとつて用のない俳優である。

(四四、一二、三〇)

四、人生と抽象と

1

普通の解釋に従へば抽象とは具象の正反對である。抽象する作用は常に事物の具象性を破壊し、抽象せられたるものは既に具象性を失つてゐるのである。併し自分の考は少しく普通の解釋と違つてゐる。自分の解釋が正しいならば、具象性を破壊するものは抽象作用其ものに非ずして抽象の方法である。従つて具象性を破壊する抽象もあれば、具象性の印象を一層明確深邃にする抽象もある。

若し事實と云ひ具象と云ふことが吾人の感官を刺戟する猥雑なる外界

の一切を意味するものとすれば、彼の現實乃至具象の世界は既に吾人の知覺をすら逸してゐる。況して吾人の悟性乃至理性に映する世界の姿が此種の現實を離れ、具象性を失つてゐることは云ふ迄もない事柄である。知覺は無意識的に外來の刺戟を選択する。更に悟性と理性とは經驗の價値と意義と強度とによりて知覺の世界に選擇を施す。選擇するとは或種の經驗を強調して或種の經驗を捨象することである。抽象作用を度外視して世界を認識することは徹頭徹尾不可能である。従つて現實の世界具象の世界は抽象作用を俟つて始めて吾人の頭腦中に成立するのである。世に抽象的に非ざる具象界は存在し得ない。具象の世界は抽象作用の子である。現實の世界は吾人の創造する處である。

吾人が猥雑なる外來の刺戟中より現實の世界を創造するに當りて、渾沌を剖判す可き重要な原理となるものは、強調せられ若くは捨象せらる可き經驗の意義である、而して經驗の意義を決定するにはリツプスも説けるが如く二様の要素がある。一つは經驗そのものが意識に對して有する壓力である、強度である。一つは其經驗と吾人の要求との適合不適合の呼吸である。狹義に於ける其經驗の價值である。若し此兩面が美しい調和と平衡とを保つならば、其強度と壓力とによりて吾人の世界に一定の地位を要請する經驗は、隠れたる自我の要求と何等の鬭争なくして其要請する地位を占有することが出來、又自我の要求によりて強調せられ若くは捨象せらる可き經驗は、知覺の側より何等の顯著なる抗議を受

ることなくして其抑揚を完くすることが出來て、吾人は素朴無邪氣に古典主義の世界に優游するを得る譯である。併し吾人の世界に在て古典主義は遠き世の破れたる夢となつた。破れたる夢を慕ひて新しき世に其復活を圖らむとする新古典主義はあつても、昔ながらに素朴無邪氣なる古典主義の姿は今の世の何處にも發見することを得ないであらう。少なくとも自分一己の世界に在りては、知覺の世界に於いて一定の強度と壓力とを有する經驗に對して、隠れたる自我の要求は我が求むる處は此の如く醜き者に非ずと顔を背ける。自我の要求より出發する經驗の抑揚に對して、知覺の世界は現實を離れたる白日の夢よと嘲弄する。要求の眼より見れば知覺の世界は姿醜く、品卑しく、碎け且つ歪んでゐる。知覺の世

界に立脚すれば要求の世界は實相を離れたる空しき紙の花に過ぎない。茲に至りて始めて現實と理想とは主義として鬭争し、具象と抽象とは兩立し難き極端となつて、抽象作用は意識的に非ざれば行はれ難い事となるのである。捨象とは拒斥である、放逐である。一面に、焦燥する自我は眼を瞋らし肩を聳かして醜き知覺を擯出する。一面に、捨象せられたる經驗は怨靈となりて新しき世界の四周を脅迫する。此の故に吾人の世界は第一に知覺と要求との兩端に分裂し、第二に不安にして強制の陰影を残し、第三に稀薄にして本能の強健を缺くのである。

併し吾人の意識に内界統一の願望ある限り、吾人は依然として抽象の歩を進めなければならぬ。經驗に抑揚を附して人生の精髓を選択しなけ

ればならぬ。貧弱なる文明の遺産を繼承し、不統一なる知覺の世界に生れたるだけに、愈々切に抽象の歩を進めなければならぬ。明治の日本に生れ合せたる吾人は大向ふから人生の芝居を覗く連中である。前面にウヨウヨする無数の頭顱と、前後左右に雜談する熊公八公の徒と、場内の空氣を限る鐵の格子とを抽象して、せめて頭腦の世界に於いて棧敷の客とならなければならぬ。吾人の抽象に反抗と感傷との臭あるはやむを得ない。兎に角に予は抽象の生活を愛する。

抽象は超脱となり、超脱は包容となる。予と雖も之を知らざるものではない。併し此不統一なる世界に生れて、誰か自ら詐ることなくして包容の哲學を説くを得やう。予は抽象の低き階段に彷徨する。故に予は抽

象の哲學を説く。

2

前段の論理を摘要し添補する。

具象とは五官よりする印象を如實に、遺漏なく保存するの意ならば、人間の世界には何處にも具象と云ふものはない。若し具象とは經驗の意義、本質、價值を掲げ出すの義ならば、内的要求より出發するの抽象は愈々具象性を強烈にするの作用である。真正の具象性は抽象の成果として到達せらる可き状態である。

第二の意味に於ける具象の概念は經驗の本質を掲揚し保存することを精髓とする。經驗の意義を捨象する作用が即ち具象性を破壊するの抽象

である。抽象が具象性を破壊するには二様の途がある。第一は經驗の内容を捨象して其形式のみを保存するのである。第二は猥雑なる官能的刺戟に執着して經驗の意義本質を逸するのである。感覺的現實を偏重する者は形式的普遍のみを求むる者と同様に抽象的である。具象性を破壊する悪抽象たるに於いて兩者の間に二致がない。

事件や行動の報告よりは情調情緒の報告の方が更に具象的なる場合がある。情緒情調の報告よりは思想の報告の方が更に具象的なる場合がある。事件や行動の報告に非ざれば、事件や行動の報告を通じて思想感情を暗示するに非ざれば、具象的でない様に考へるのは反省を缺ける淺薄なる思想である。

併し事件行動の如き知覺的具象と、思想感情の如き抽象を経たる具象との間には顯著なる一つの差別がある。それは後者が同様の經驗を経て同様の抽象を試みたる者に非れば通せざることである。思想感情の直寫は同類の間にのみ通ずる貴族的隱語である。思想感情の傳達を欲して事件行動の報告を欲せざる者の爲に存在する神秘的記號である。余は他人に煩されずして靜に自己の生活を經營することを欲するが故に自己の生活を公衆の前に隠す抽象的言語を愛する。

但し茲に云ふ抽象とは知覺の世界に就いて順當に其意義本領を強調し、其偶然を刈除し行くの抽象である。知覺の世界に就いて抽象の歩を進むれば自然に價値の世界に到達すると云ふ一元的信念に基くの抽象で

ある。

3

具象と鬭争して相互に其根底を奪ふ時吾人の抽象は古き具象の征服となり、新しき具象の創造とならなければならぬ。吾人の世界は危機に臨んでゐる。進化の曲線は急激なる屈折を要する。自我の脈搏は今其調子を亂してゐる。吾人の内界には騷擾があり醗酵があり憤激がある。

新しき具象を創造するには、志士となつて所謂事實を改造するか、哲學者となつて事相を観ずるの見地を變更するか、此二の外に道はあるまい。志士の事業は知覺の世界に就いて自我の要求に協ふ抽象を強制するのである。「永恒の相の下に」観する哲學者と雖も經驗の抑揚を新にして知覺の

世界に抽象を施すに非れば、換言すれば嘗て重大なる意義を附したるものを軽くし嘗て光を蔽はれたるものを明るくするに非れば到底現實其儘を受納することを得まい。志士と哲學者の抽象は勇者の抽象である進撃者の抽象である。

唯弱き者、感傷する者は身邊に蝟集する厭ふ可く、憎む可き知覺に對して、手を振つて之を斥けるよりも先づ眼を背けて其醜より遁れむとする。此の如き抽象の生活には固より不安と動搖と悲哀となきを得ない。現實の包圍に脅迫せらるゝ抽象の悲哀は吾人を超脫の努力に驅るのである。

事實の改造に絶望する時、暫く三面の交渉を絶つて靜かに一面の世界

に沈湎せむとする時、眼を背くるの抽象は吾人の精神に搖籃の歌を唱ふの天使となるのである。流るゝ涙を拭ふの慈母となるのである。現實の光を遮るの黄昏となるのである。

(四十五年三月九日記)

五、さまざまのおもひ

1

如何にして新聞雑誌を讀む可きか、此問題が僕にとつては一苦勞である。全然讀まないのは現代に對して餘りに失禮である、同時に自分にとつても少々心細い。多くを讀むのは餘りに煩さい。同時に更に／＼有意義なる生活と修養とに費す可き時間が非常なる蠶食を受ける。

人格上思想上尊敬に價する少數の人を擇んで其人の作丈を讀むことゝすれば、甚だ簡單に現代日本との接觸が出来る譯であるが、それでは未だ知られざる者、未だ來らざる者、竊に近きつゝある者の豫感に觸れる

ことが出来ない。現今の思想界藝術界には勿論尊敬す可き人が居るけれども、此等の人の大多數は唯自分と共鳴若くは同感すると云ふ意味で尊敬に價するのみである、或は自分の持たぬものを持つてゐると云ふ意味に於て尊敬に價するのみである。自分の精神を包んで之を高き處に押し進め、自分の精神の暗處を照して戰慄と羞恥と努力と精進とに躍らしむる者は後より來るか若くは全然來らざるかの孰れかでなければならぬ。現代に對して觸れ甲斐のある觸れ様をせむと欲する者は、決して未だ知られざる者を蔑視することを許されない。従つて名前を捨て讀むことは未だ十分なる新聞雑誌閱讀法と云ふことが出来ない。

唯最も安全にして秋毫の申分なき省略法は名前によつて讀まないと云

ふことである。特定の名前に遭逢する毎に何の躊躇もなくドシム頁を飛ばして行くことである。固より人には時にどつて出来不出来がある。併し其人の内生活以上に卓出する出来もあり得なければ、全然内生活の俤を傳へぬ程の不出来も亦ある譯がない。作品を通して作者の内的生命に觸れむと欲する者は凡下なる者の佳作よりも偉大なる者の拙作に接することを樂む。凡下なる者の佳作を蔑視するの勇氣は吾人を新聞雑誌の苛責から救ふ唯一の道である。此道に従ふことによつて吾人は千頁讀む處を百頁讀んで事足りる様になる。此方面に於ける生活の單純化は茲に立派に解決を得る譯である。

尤も此の如くにして「讀まざる文學者」は讀者によつてそれ／＼に選

擇を異にするであらう。従つて如何なる小作家と雖も凡ての人によつて讀まざる部類に編入されるやうなことはないであらう。世界は廣く、造化の配劑は妙を極めてゐる。群小に至るまで夫々の讀者を有して文壇の一角に存在の理由を有することは感謝す可き天帝の恩寵である。吾人が吾人の標準に従つて「讀まざる人」を決定することは決して天帝の仁慈を妨ぐる結果には立至らない。萬人に共通して許されたることは各自の「讀まざる人」を選択することである。

——僕はかう考へてゐる、併し僕は考へた通りに實行してゐない。退屈な時には讀まない筈のものも遂手にとることがある。手元のないものは假令讀まうと思つたものでも、遂恐圖々々してゐる間に敬意を表する

ことを怠つて了ふ。斯の様にして僕は親が附けて呉れた名前の三太郎らしく懶惰なる現代生活をしてゐるのである。併し考へ直して見れば、僕を曳すり出して雑誌屋の店頭にも立たしめず、雑誌持の友人の處にも走らしめない様な作を讀まないからと云つて、何も大業に悲觀したり、親の附けて呉れた名前を侮辱したりするにも當らないことであつた。

2

——は例によつて女性を痛罵してゐる。併し其言ふ處を聞くと彼の非難は中分なく男にも當篋りさうである。少くとも男の一人なる僕にはヒシ／＼と當る處が多い。僕は寧ろ女性を呪ふ前に男性を呪ひたい。寧ろ男女の區別なく人間を呪ひたい。男に對立したる意味の女に對して、

僕は唯自ら持たざる者を持つてゐる人に對する親愛と尊敬とを感じる。男性の散漫と不純と放縱との羞恥を感じる。

男は女の名によつて人間を呪つてゐる、女は男の名によつて人間を呪つてゐる。共に其最も求めてゐる處に就いて最も不満を翹へてゐるのだから面白い。女を罵る男の根本の要求は本當に愛して呉れる女を發見することにあるのであらう。男を罵る女の根本の要求は本當に愛して呉れる男を發見することにあるのであらう。僕と雖も固より本當に愛して呉れる女が欲しい。併し僕はそれよりも先に、自ら本當の男であり、人間でありたい。僕の根本要求が茲にあるが故に、僕は男を嫌ひ、人間を嫌ふのである。問題は他人に在らずして自己にある、女に在らずして男にある

本當に男となり人間となるに非れば、假令眞正に愛して呉れる人がい
ても、僕には其愛を甘受し、味解する資格がない。淺ましきは男の要求に
協はぬ女よりも寧ろ眞正に愛することを得ざる男である。三太郎は第一
に男となり人間とならなければならぬ。僕の自己嫌惡には未だ女性を罵
つてゐる程の空虚がない。

3

決定した態度を以て人生の途を進んで行く人の姿程勇しくも亦羨しい
ものはない。此等の人の日に輝く凛々しさに比べれば、僕などは唯指を
啣へて陰に潜むより仕方がない。併し汝等は何故に愚圖々々するぞと叱
る人の姿を見る時、其人の長き影には強制と作爲と威嚇と附景氣と、更に

矯飾偽善の色さへ加はつてゐるのは如何したものであらう。彼等に比べ
れば僕等は丸で品等を異にする上品の人である。彼等は偽人である、僕
等は眞人である。彼等は飴細工の加藤清正である。僕等は血の通てゐる
田吾作椋十である。吾人をして僅に自信を保たしむる者は實に此飴細工
の加藤清正である。

「僕は自分のつまらない者であることを忘れたくない。併し自分のつま
らないことさへ知らぬ者に比べれば僕等は何と云ふ幸な日の下に生れた
ことであらう。此差はソクラテスと愚人との差である。此事を誇としな
いで、又何を誇としやうぞ。」

4

自分のつまらないことを知る者はつまらない者でなくなるか。——つまらぬ者でなくなる者は上品の人である。併し下品の者はつまらぬ者なることを知つて依然としてつまらぬ儘に止つてゐる。嚴密に云へば眞正に自覺せぬ者、眞正に碎かれざる者であらう。僕は上品中の下品に屬する。僕の心は未だ眞正に碎かれてゐない。眞正に碎かるゝ日の來る迄僕は此苦しい日夜を續けるのだ。

二三年前の夏、朝じめりする草を踏んで高野の山を下つた。宿坊を出る時に、一ヶ月の馴染を重ねた納所先生は、柔かに白い餅に、細かに篩つた、稍青味を帯びた黄粉をつけて、途中の用意にと持たして呉れた。山を下れば食料の必要な僕も、人の好意を無にせぬ爲に難有く之を受取つ

て、稍持餘し氣味に風呂敷に包んで寺を出た。神谷の宿を出外れた坂路で僕は自分の前を行く一人の癩病やみに追付いた。僕は突差の間にあの餅を此人に呉れて荷物を軽くしやうと思ひついた。癩病やみは其きたない顔に美しい笑を見せて、丁度飢じくつて弱つてゐる處でしたと、幾度もく禮を云つた。そうして僕が軽く挨拶して通り過ぎる後から繰返し〜嬉しさうに感謝の念をのべた。僕は人にものをやつてあんなに嬉しがられた事がない。人から禮を云はれてあんなに嬉しかったことがない。僕は自分の餅を呉れた動機を考へて耻かしくなつた。

僕は此眞正に飢ゑた人を見て羨しかつた。心の底から與へられた幸福を経験する人を見て羨しかつた。癩病やみは柔に白い餅の返禮として、

真正に求むる者の幸福を僕の眼の前に突付けて呉れた。此宇宙に迷ふ生活から逃れて寧ろ彼の癩病やみになりたいと思ひながら僕は重い心を抱いて山を下つた。三年後の今日もまだ僕は真正に求むる者の幸福を知らずにある。

僕は與へらるゝ日よりも寧ろ求め得る日を待兼ねてゐる。併し道草を食ふことの趣味に溺れたる者の上には、恐く死ぬ迄も待兼ねる日は廻つて来ないであらう。

5

黒味を帯びた緑は日の影を濃くして、日の光を鮮かにする。初夏の森を彷徨つて、葉を洩るゝ光の戯れをじつと視凝めてゐると、自分は時とし

て盲が眼を開いた時に感ずるだらうと思はれる程の驚きを感じる。一瞬間の間自然は「始めて見たる」ものゝ如く新鮮に自分の心に迫つて来る。何の誇張も虚偽もなく「驚いた」と名け得べき瞬間の経験をすることが出来る自分は何と云ふ仕合者であらう。一切の哀歌に關らず僕の心は未だ死ななかつた。嗚呼僕は黒すんだ緑と、日の光と、初夏の空氣とに感謝する。

(五月十五日正午)

六、夢想の家

1

貧しき者、淋しき者の慰安は夢想である。現實に於いて與へられざる事物と雖も之を夢裡に經驗するは各人の可憐なる自由である。此貧しき國に生れて、貧しきが中にも貧しき階級に育つ者にとつて固より此夢は灰になる迄實現される期はあるまい。併し堅く汚れた床の中に困臥する身にも、豊富華麗なる生活を夢るだけの自由は許されてゐるのである。西洋文明史家の説に従へば古代の心は其末期に至つて屢々怪しき夢の襲ふ所となつた、而して其怪しき夢は終に現實となつて、茲に新なるロマン

チックの心が生れた。現今日本の住宅建築も亦正しく怪しき夢に襲はる可き時機に逢着してゐる。此夢は國家富力の充實と國民生活の精化とに従つて早晚實現されずには居ないであらう。自分の夢は此等の數多き夢の中の最も見すばらしい、最も専門に遠い、而も最も實現し難き夢に屬してゐる。

2

平安朝以後に發達して來た日本住宅建築の特色如何と云ふ問題に對しては専門家の間に定めて精到な解釋があることであらう。構架の様式、材料の選擇、裝飾應用の方法等悉く日本建築固有の特色があるに違ひない。併し住宅建築は直接に國民生活と緊密の關係を有する實際的設備と

して藝術家乃至好事者の意匠にのみ放任する譯に行かない。住宅建築の根本特色を決定する主義となるものは寧ろ國民生活の理想である。如何に國民生活の要求を充し、如何に國民生活に影響するか、この點に於いて、住宅建築の精神と特色とは成立するのである。故に今此點に於いて日本住宅建築の特色を求むれば、從來美術史家の屢々自賛せる處に従つて、「自然との調和と抱合」とに在りとする外自分には新しい見解がない。固より昔の寢殿造書院造の如きは、今日吾々の起臥する家屋の様に、吹晒し同様とも云ふ可き程完全を極めたる「自然との抱合」を實現してゐなかつたであらう。併し其主義は依然として家屋内に於ける自然(外界)の支配を許容し歓迎するに在つたことは疑ひがない。

尤も「自然との調和抱合」と云つても外より見ると内より見ると二様の區別がある。外より見るとは街頭を行き若くは山莊を訪ふ人の眼に周囲との調和が美しく浮び出ることである。此の如き調和は固より無條件に望ましいことに違ひない。併し住宅建築本來の目的から云へば此の如きは寧ろ枝葉の閑問題である。吾人は盆景の中に陶製の家屋を置く様に、自然景を點綴し補充し裝飾する爲に住宅を築くのではない。快く、暖かに、柔かに其中に住み、靜かに讀書し思索し戀愛し團欒し休息し安眠するが爲に住宅の功を起すのである。従つて自然と抱合するの主義も亦主として内に住む人の立場から解釋しなければならぬ。椽にイみて庭を眺め

蟲を聴き、障子を開いて森に對し月を見るの便を主とするが如きは即ち内より見たる自然との抱合である。

4

自然が柔かに温く吾人の生活を包む限りに於いて、自然が吾人の思索と事業とに對する専念を妨げる程積極的に働きかけて來ない限りに於いて、自然との抱合を理想とする住宅は固より望ましいことである。併し自然は常に笑つてばかりは居ない。靜かに晴れ渡る若干の日と、降る雨のしめやかに、柔かに、煙籠むる若干の日とを除けば空は常に怒るか曇るか泣くかである。驟雨や強雨は障子を開けて眺めてゐる間こそ豪爽であるが、讀書思索勞作の孰れに對しても随分落付かぬ氣分を誘ひ勝であ

る。殊に灰色の雲の押かぶさる日と、風のざわ／＼騒ぐ日は堪らない。然るに従來の住宅建築には此等の影響を調節する機關が具つてゐないから、吾人は野に歩む乞食の如く自然の支配に身を任せなければならぬのである。雨の強い日風の烈しい日は雨戸を締めなければじつとして居られないのは吾人の住む明治の住宅である。而も障子を締めても雨戸を閉しても一家を包圍する自然の情調は遠慮なく室内に侵入して來るのである。特に外部の音響に對する防禦機關の具備してゐない事は都會生活ををする者にとつて取分け嚴酷なる責罰である。無數の騒音が波濤の如く沸き立つ中にあつて輕薄なる住宅に一身を托する生活は随分堪らない。自然(街頭の音響周圍の人事をも含む)の調子の遙かに溫柔であつた時代、

若くは自然の齎す情調を呼吸することを以て生活の重なる内容とするこ
とが出来た時代に於いては、自然との抱合を主義とする住宅も生活の理
想と大なる矛盾を感じずに居られたであらう。吾人の如く興奮し易く疲
勞し易き神経を持つて峻嶮なる自然と人事との中に生息する者にとつ
て、住宅建築は城砦の如く吾人の生活を外界の襲撃から保護して呉れる
ものでなければならぬ。自分の怪しき夢は既に根本主義に於いて在來の
住宅に不満を感じるのである。特に借屋住居の身として節度なき自然の
襲撃に疲れたる心には此不満が一層の苦さを以て迫り來るのである。自
分の夢想の家は「求心的統一」を、「外界よりの分離」を主義としてゐる。

此の如き主義の轉換は日本建築の様式に少からぬ變化を要求する様
なるかも知れない。漫遊の外客は必ず之れを痛惜し、保守と事大とを兼
ぬる美術家は必ず之に附和するであらう。併し吾人は祖先の爲に隱居所
を建立するに非ずして、自己及び子孫の爲に住宅を建築するのである。
外國人のエギゾテイシズムに満足を與へる爲の見世物を造るに非ずし
て、自らの身と心とを住ましむ可き安宅を設計するのである。大極殿の
再建と住宅建築の様式とは自ら區別して考へられなければならぬ。内よ
り迫る必要は内より吾人の生活を變形して行く。吾人は此方に身を任せ
るに何の躊躇をも要しないのである。自分は將來に向つて日本の美術と
日本の文學と日本の思想と日本の文明とを造るに最も適當なる住宅を求

むるに過ぎない。

6

外界の侵入、特に音響の侵入を防ぐ爲に、夢想の家は石造でなければならぬ（石造と通氣及び温度との關係は専門家に諮るより仕方がない）。少くとも外界の威力を防遏して獨立の世界を形成するに堪へる程の威嚴ある材料によつて構成されなければならぬ。採光は自然の晴曇明暗に絶對的支配權を與へぬ範圍に於いて明るい方を好み、從來の日本建築に比して今少しく暗く今少しく深味のある光を探る。夢想の家に在つて自然は利用さる可き者であつて支配す可き者ではない。屋内の情調を構成する要素は其構造及裝飾から吹き來る一定の氣分でなければならぬ。屋内の

情調に變化を與ふる權力も亦居住者の掌中に握つて、自然の氣まぐれなる干渉を許さない。

7

夢想の家に在つては一構の總體が外界に對して獨立するが如く、各室も亦相互に獨立してそれ／＼の自主を保たなければならぬ。在來の日本建築に在つては外界に對する獨立が曖昧であつたと同時に各室の獨立も亦甚だ不安であつた。襖と障子とは極めて信賴す可からざる障壁である。室と室との間には音響が無遠慮に交流し、各室の獨立は隨時の闖入を豫想する不安に慄へてゐる。従つて讀書も思索も安眠も戀愛も凡て其專念と集注と沈潜とを奪はれて、真正なる孤獨の經驗は容易に居住者の

精神を見舞はない。自らを孤獨の境に置くことの自由を奪はるゝは生活の眞味に徹せむとする個人にとつて誠に非常なる損害である。故に夢想の家の各室は相互の孤獨を十分に尊敬することを以て理想とする。主要なる室には必ず次の間がある。次の間と廊下との境には重い扉があつて内から鍵をかける様に設備されてある。夢想の家に住む者は重い扉と次の間とを隔て、廊下の遠い音を聴き乍ら、外界の闖入を防禦したる石造の室に在つて讀書し思索し戀愛するのである。眞正の孤獨と閑寂とを領して魂の眼を内に向けるのである。

8

夢想の家の室内装飾は各種の情緒情調と調和して此等と共鳴し助成す

るものでなければならぬ。餘りに積極的刺戟的に自己を主張する者は室内生活の凝滞を誘致する危険がある。書齋の壁は緑に燃ゆる五月の草の色に塗り(又は張り)たい。寢室の壁は北の國の新月に似た蒼色に塗らう。書齋の空氣は暖かに柔かに心を包むことを要する。寢室の空氣は寒いと云ふ感じもなく、悲哀の情緒をも刺戟せぬ限り、唯無限に沈靜の情調を吹いて精神を安靜の境に誘致することを理想とする。寢室の窓には深くカーテンを垂れて晝間と雖も刺戟に疲れて焦燥し興奮したる精神の避難所とする。

9

夢想の家も決して自然との抱合を拒まない。静かなる雨の音、遠き蛙

の聲、曉の枕に通ふ鶯の音、寢室の硝子窓を覗く木立と月光、此等の情調を歓迎するが爲に開閉の自在なる厚い硝子の窓と様々の色に染めたカーテンとを具へて、書齋又は居室に於いて直接に自然と親むの機縁を開いて置く。而して更に自然との親和を緊密にせむが爲に、夢想の家には広いバルコンを造る。草色の縁をとつた帆布は日光と微雨とに對してバルコンの上に團欒する大人と小供とを保護する。圓卓を圍む椅子には肱つきがある。

10

夢想の家は疊に寝そべる者の懶惰なる安逸を拒まない。併し疊の觸覺と温覺とは餘りに堅く餘りに冷たい。故に疊の代りにダリーヤの花の様

な深紅の色の天鷲絨を張つたソファ數臺を備へて置く。

11

最後に夢想の家の庭園には茶室がなければならぬ。茶室は日本從來の住宅建築の理想の精髓である。常任に自然の支配下に立つに非ざる限り此處に掛物を愛玩し、此處に湯の沸る音に心を澄し、此處に花を品し、此處に雨を愛した祖先の心は凡て懐しい。夢想の家に住む者は現代の繁雜を脱れて、古き世の夢を見むが爲に時々此茶室に安息を求めるのである。

12

夢想の家は時を経るに従つて益々其細條を明にして行くであらう。併

し朝毎に厨の音と小供の泣く音とに醒める身には何と云ふ遠い世の幽な夢であらう。

(六月十七日朝)

七、山上の思索

1

赤城は柔かに懐かしい山である。併し頭上を密閉する雷雲と、身邊を去來する雲霧と、絶えて行人なき五里の山道とは人工に腐蝕せる都會の子を嚇すに十分であつた。自分は全存在の根柢を脅かして殺到し來る自然の威力の前に戦慄し乍ら、自分の生活の如何に宇宙の真相に徹するこゝと淺く、漂蕩し、浮動し、兒戯し、修飾する生活であるかを思つた。此大宇宙の中に在つて、自分が自由に快活に呼吸し得る空氣、自分の生活が眞正に自己の領域として享受し得る元素エレメントは極めて少い。一度家庭と朋友との

團樂を離れ、一步を都門の外に踏み出せば、自分の情調は直ちに混亂と迷惑とに陥らざるを得ない。今大自然の威力と面々相接して自分は頻りに自我の縮少を感じる。併し此感情を征服して大自然と合一すること能はざるが故に、換言すれば生死を度外に附して威壓せらるゝの自己を威壓するの自然と融合せしむること能はざるが故に、自分の意識を占領する者は常に恐怖不安矛盾の情調であつて崇高の感情は遂に成立しないのである。自分の嘗て経験したる崇高は自然と面接して其威力と融合し得たる雄偉なる先人の魂を掩堡として、藝術品の影に身を潜めつゝ、親の手に縋り乍ら僅かに怖ろしき物の一瞥を竊む小兒の如く、辛うじて近き得たる矮少なる影の國に過ぎなかつた。真正に崇高を解する者は、換言すれ

ば真正なる崇高の創造者は、自己の全存在を大自然の前に投出して其威力と親和抱合し、其威力と共に動き共に樂む者でなければならぬ。生活の根柢を深く宇宙の威力の中に托する者でなければならぬ。嗚呼我が魂よ、汝融和抱合の歡喜を知らざる矮少なる者よ、汝根柢に到らずして、浮萍の如く動搖する迷妄の影よ、肆意にして貧弱なる選擇の上に其生を托する不安の子よ。汝の道は遠い汝の道は遠い。

2

社會の前に、歴史の前に、他の人類の前に、自分は餘りに多くのジャスティフィケーションを持つてゐる。従つて真正の謙遜を感じる事が出来ない。反語と皮肉とに飽和したる自分の道徳は自分の魂をゴムの如

く碎け難く、鰻の如く捕捉し得ざる存在にして了つた。唯舊約の神エホバは自然の威力の名に於いて雷雲の中より自分の魂を壓迫する。自分の弱少なる精神と肉體とはエホバの前には何等のジャステイフイケーションもなく、赤裸々の姿を暴露して戦慄し潜伏する。文明と都會とに害毒せられたる自分の魂は、自然と野蠻との神によりて先づ其心を碎かれ、根抵から邪氣を洗はれなければならないのかも知れない。自分は今驕慢と恐怖と反抗と相錯綜する心を以て人跡未到の深山大澤にエホバを禮拜する者の心を思ふ。先づ其魂を襲ひ来る可き無限の寂寞と恐怖と無力の自覺とは眉を壓する許り鮮かに自分の想像に迫つて来る。更に此感情をイパーキンデンして其上に出で、始めてエホバを我神、我父と呼び得可き

日の曉の心——心を衝きて湧き来る無限の力と、青くひそやかに全心を涵す可き無限の静寂と——も亦我が豫感する心の上に、幽かに遙かなる影を落して来る。

3

自然は如何に荒涼寂寞を極てゐても二人三人と隊を組んで此荒涼の中を探る者は要するに社會を率ゐて自然に迫るのである。社會の掩護の下に自然を強要するのである。徹頭徹尾唯自己一身を挺して、端的に自然に面する者に非れば、真正に孤獨を経験し、真正に自然の威力を経験することが出来まい。單身を以てフレムトなる力の中に浸入し行く時、フレムトなる力の中に自己を没却して而も其中に無限の親愛フロイントシャフトを開拓し行

く時、始めて真正に自己の中に動く力の頼もしさを感じるを得やう。自分
分は人跡未到の地に入る探検者と名山靈地を開ける名僧知識の心境に對
して大なる崇敬の情を捧げる。エホバと和げる心も、未知の領域に邁往
する勇氣も、荒涼たる自然の中に在つて新鮮に緊張せる情調も——悉く
羨ましからぬものはない。物質の世界に於ても、精神の世界に於ても常
に此「深み」と「張り」と「力」が欲しい。

4

人影も人里も見えぬ松の大木の並木路を辿る時には、ごんなにか人と
云ふものゝ臭が戀しかつたであらう。牛馬の踏み荒した無數の細路の間
に迷つて、山巔から襲ひ來る霧の中に立盡した時、不圖眼に入つた牧牛者

の影はごんなにか自分の心を温めたであらう。牧牛者は半里の山道を迂
回して自分を宿屋の前迄案内して呉れた。自分は禮心に袂の中にあつた
吸ひ残りの「八雲」をあげた。牧牛者は氣の毒さうに禮を云て霧の中に隠
れて行つた。

社會を離れて自然と自己との中に没入せむとする時、自分は愈々社會
的要求の徹骨徹髓なるを悟る。自らを社會より遠ける時、自分は益々社
會と自己とを繋ぐ縷の如く細きものの如何に自分の生活にとつて切要で
あるかを知る。余は山に入るに先つて、山巔に自分を待つ可き靜かなる
旅舎と、綿の入つた蒲團と、温かなる飯と、夜を照す燈火と、身を浸す可き
湯と、親切なる主人とを豫想して來た。山に落付いた後、日毎に待たれる

ものは親しき人の音信である。余が自然と自己との中に沈湎すればする程、自分の周囲に在つて此沈湎を支へて呉れる人と云ふもの——社會と云ふもの——の温かなる好意が必要になつて来る。山中に迷ふ者を正路に導くことは八錢の「八雲」を以て報いらる可き好意ではない。自分を快適に心の世界に逍遙せしむる爲に萬般の煩瑣なる世話を焼いて呉れることは、決して五十錢や一圓の旅籠料を以て償ひ盡すことが出来ない。余は山に入つて始めて切實に社會に對する感謝の念を覺える。全然社會を蔑視し去るは忘恩である。

高きに翔る心が矮少なる者を蔑視し、卑俗なる者を嘲笑するはやむを得ない。併し純朴なる同胞の感情、小兒の如き社會的愛情を失ふことは

決して些少なる損害ではない。

5

社會を嫌惡するは余が生活の一面に過ぎない。社會と隔離するは余が要求の一面に過ぎない。人類を嘲笑するは余が感情の一面に過ぎない。眞正の希望は社會と融和し人類と親愛したいのである。自然と社會と自己と、三面協和するに非れば吾人の生活は遂に全きを得ない。一切を包容する底知れぬ心を思ふ時、余が心は羞恥と憧憬とに躍る。

6

妥協を忌む、孤立を忌む、狷介を忌む。而も眞正なる融和包攝の心境の容易に到達し得ざることを思へば、慘として我が心痛む。

都會の猥雜なる刺戟を脱れて、靜かに本を讀み仕事を爲す爲に自分は山の中に来た。併し山の中に来て見れば自然は餘りに問題に富み、自然は餘りに自らの命に溢れてゐる。紙に刷つた文字の奥に浮ぶ朧な人生や、概念と概念とを校量し區別し排列する思索などを押し退けて、自然は今の自分の生活の内容を満してゐる。讀書と思索とに倦んだ際のリフレッシユメントに利用せむとしたのは餘りに自然を輕蔑した仕打であつた。躑躅の花の咲き残る細徑は檜の森を出つ入りつして、緩かに峠の方に上つてゐる。自分は朝露の置く若草を踏み乍ら、色々のことを思ひつゝ行く。

人を對手にする生活は随分苦しいことが多い。對手にする人も亦自己と同じ様に弱い、氣の變り易い、自己と自然と社會との凡てに就いて様々の苦惱を裏んでゐる人間であることを思ふ時、少くとも對手の心持を察して之れを勞らなければならぬ丈の苦勞がある。自分の察しが至らぬ爲に不知不識其神經を無視することはあらう。巫山戯る興味の圖に乗つて或程度迄人の神經を玩具にする様な粗野な振舞も亦ないとは云へない。併し大體から云へば、憤怒と憎惡輕蔑とに燃えて敢てデリカシーを無視する僅少の場合を除けば、人と人との間には相互に交讓する可憐なる苦勞の絶間もない。交讓は固より愛の發表である。併し假令愛の發表であつても、常に自分を加減し鹽梅する不自然と、我儘に自分の全體を露出し

得ざるもどかしさと、相手に對する愛の名に於て其前に自分の幾分を詐つてゐると意識する心元なさと、此等の入り亂れた感情が人と人との間に霧の如く立迷つて、真正に心の底の底迄さらけ出した朗かな融合を経験することは人の一生に幾度もないであらう。親愛する魂と魂との間に於いても既にさうである。況して複雑なる利害の關係が混入し易い他人同士の應接は甚だ厭はしい場合が多い。人間は同類の間に於いて多く孤獨である。途中の遭逢に當つても素朴なる同類の親愛を感じる程の優しさを持つてゐ乍ら、人の魂と魂とは何故か容易に根抵から一致することが出来ない。

同類の間に在つて孤獨なる人の魂は自然に向つて響を一つにするの對

手を求める。自然にも固より個性がある。或自然は自分を威壓し或自然は自分を拒斥する。併し自然には自分の弱い神経を痛ましめて迄も勞つてやらなければならぬ程の脆さがない。思ひがけない方面フェースに觸れて顔を反けなければならぬ程の卑さが無い。自然の前に自分は我儘に露骨に自分の心をさらけ出すことが出来る。自分の心をさらげ出せば、苟も自己と親しみを感じる程の自然ならば必ず自己と同じ心に動いて呉れる。自然の前に自分は孤獨ではない。暗室の中に一人淋しい思を培ふ時と、調を等しくする自然の中に獨歩する時と、吾人の經驗の色調の如何に性質を異にするかを思へ。同類の中に在つて孤獨なる人の魂に、自然は始めて奥底なき親みと無限の融アインシテインミイカイト和フエーとの歡喜を教へるのである。

併し自分の親愛を感じるは唯特定の自然である。嗚呼エホバと親愛し得る魂となり得むには、雲霧と雷霆との中にあつて之を親愛し得る魂となり得むには――

(七月六日夕)

八、生と死と、

1

死を怖れざることの論理——一厭世者の手記より

余の生に何の執着に價する内容があるか。凡ての經驗は之と矛盾する何等かの記憶、何等かの豫想、何等かの論理に脅かされて、酒は水と交り、形は影と混じ、現在は過去と未來とに汚されてゐる。全心を擧げて追求す可き目標も、全身を抛つて愛着す可き對象も、全存在を震撼す可き歡喜と悲痛とも最早余にとつては存在してゐない。絶滅の恐怖は唯絶滅せしむるに忍びざる何物かを確實に占有する者にのみ許さるゝ情緒で

ある。真正に生きる者にのみ許さるゝ経験である。然るに今死が余より奪はむと脅す處は真正の生に非ずして唯生の影である。余の前に置かれたる選擇は生か死かに非ずして、生の影が死か、死に劣る生か死かに過ぎない。固より余は淺薄なる愛情によつて親朋に繋がれてゐる。余は彼等の世界から消失することを悲み、余の死を慟哭す可き彼等の悲哀を憐む。併し余に真正の生を教へるの力なき一切の關係は要するに余にとつて真正に存在の價值があるものではない。彼等は畢竟未練に過ぎない、幻想に過ぎない。此未練を擺脫すれば、余は常に死に對して準備されてゐる。死よ、汝の欲する時に來りて余を奪ひ去れ。

加ふるに死は生の自然の繼續である。最もよき生の後に最も惡き死が

來る理由がない。死と死後とは人智の測り知る可らざる處であるが、唯死に對する最良の準備が最もよく生きることには疑がない。名匠の手に成れる戯曲は最後の幕も亦美しいに違ひがない。余の問題は此の苦痛と戦ひ、此悲哀と鈍麻との波をわけて、如何に斯生の價值を創造す可きかに在る。創造の成果は甚だ疑しい。併し余が生存する間は此事を外にして第一義の問題がない、第一義の事業がない。死の恐怖は痴人の閑問題である。

2

死を恐怖することの論理——一懷疑者の手記より。

我が生には未だ深き執着に價する内容がない。併し此判断は現在の余

の事實に適用するのみである。此判断は、一切の生を擧げて其價値を否定し、余が生の蓋然性プロバビリテイと可能性ポッシビリテイとを悉く破壊し去る丈の力を持つてゐない。一切の生と、其プロバビリテイとポッシビリテイとを擧げて無價値と斷じ去る者こそ真正に死を怖れない者であらうが、此の如く斷じ去るは厭世者の誇張である、飛跳シフリングである。質實にして謙遜なる反省の上に立脚する者は、未だ知らざる生の豫感に動かされて、却て深く生に執着することを知る。真正に生きたる者は即下に絶滅するも猶余は眞に生きたりと信する自覺が慰藉となる。眞生の豫想に生きる者は此豫想を絶滅せむとする死に對して特別の戰慄なきを得ない。死は其人の生を根抵から虚無に歸せしめるからである。余は生きず、余は生きむと欲す、故に余は死を恐

る。余の死を恐るゝは嫩芽の霜を恐るゝ心である。

余は到底生きる力を持つてゐない者かも知れない。生に對する憧憬を抱いて永久に生きることの出来ない者かも知れない。併し余が肉體の生命を保つ限り、現在の事實として余には「生きむと欲する意志」がある。「生きむと欲する」意志は盲目に本能的に死を怖れてゐる。然るに死は常に一躍して余を捕へることをしない。鼠を弄ぶ猫の如く屢々余の「生きむと欲する意志」を脅かして余が生に不安の影を落す。余を死に導く力に對して何等の覺悟なき限り、吾人の生には常に死の影が交つてゐる。一度自己を保護する薄弱なる人工の搖籃を離れて、人間と社會と文明とを包圍して其運命を掌中に握る偉大なるエホバの前に立つ時、死の不安は刻々

吾人を脅かして、生きるにだに堪へざらしめる。吾人は吾人の生を確立せんが爲に吾人を死なしむる力を凝視しなければならぬ。死の恐怖は吾人の生を生根に驅る。

而して死が最後に其鐵腕を伸して急遽に余を襲ふ時、死に對して何等の準備なき余は、此フレムトなる力と對抗して不安に満ち、絶望に満ち、戦慄と動亂とに満ちて其手に落ちるであらう。余は死の刹那に於ける此の如き精神的苦悶を豫想するに堪へない。單に此刹那に對する準備の爲にも、死の恐怖は何等かの解決を強請する問題と云はなければならぬ。

嗚呼「余を死に導く力」よ。余は汝を睥視し汝を理解せむと欲す。汝の中に潜む「必然」を認めて之と握手せむと欲す。之れと握手して余の一身

を汝に托せむと欲す。死を恐怖せざるの論理は胡魔化しに過ぎぬ。感覺鈍麻に過ぎぬ。

3

余には死に對する何等の準備もない。余は暴漢の手に捕へられたる妙齡の處女の如く、全力を擧げたる抗爭と、肺腑を絞り盡したる絶叫の後、力盡きて漸く死の手に歸するであらう。

4

余が急劇に死の手に奪ひ去られたとする。余の死後に此日記が残つたとする。此日記を讀んで、余が唯死に對する不安恐怖の念にのみ満され、何等安立の地を得なかつたことを發見する時、余を愛する者の悲哀は

實に絶大にして、全く慰藉の途なきを覺えるであらう。併し後人に残す悲哀が如何に絶大であつても此事は事實である。余は死に對する不安と動亂とに満ちて死んだのである。死に對する諦めもなく、死後の生活に對する光明もなく、みじめに力なく死んだのである——若し死の瞬間に奇蹟的の經驗が起つて余の精神を靈化するに非れば。

5

余を包圍する不思議なる力よ。余は汝を神と呼ぶ可きか悪魔と呼ぶ可きか、攝理と呼ぶ可きか運命と呼ぶ可きか、自然と呼ぶ可きか歴史と呼ぶ可きかを知らない。唯余は汝が余の一切の生活——歎喜と悲哀と戀愛と罪惡と——を漂し行く絶大なる力なることを知る。やむを得ずんば余は

汝に對して弱少なる余を憐めと云はう。併し許さる可くは余は一切のセ
ンチメンタルなる哀泣と嘆願とを避けて、唯汝と一つにならむことを祈
りたい。汝と共に働き、汝と共に戯れ、汝と共に殘虐し、汝と共に慈愛す
る者とならむことを祈りたい。

(七月六日夜)

九、三様の對立

1

人是我持てりと云ふ。余は我持たすと云ふ。人は確信し宣言し主張する。余は困惑し逡巡し、自らの迷妄を凝視する。人はニイチエの如く自覺の高みに在つて迷へる者を下瞰する。余は麓に迷ひて遙かに雲深き峰頭を仰ぐ。人は一筋に前へ前へと雄叫びする。余は前へ進まむとして足を縛られたるが如き焦燥に捕へられ乍ら、自らの腐甲斐なきに涙ぐむ。人は日の光の鮮かに輝り渡る中に在つて占有と勞働との喜びに充ち溢れてゐる。余は霧の如きもの、常に身邊を圍繞して晴れざること嘆ずる。

彼等は樂觀し余は悲觀する。彼等は肯定し余は否定に傾く。余をして悲觀と否定とに傾かしむる者は余の生活と運命とを支配する不思議なる力である。不思議なる力の命する限り、余は此苦しき生活に甘じて、身邊方寸の霧を照す可き微光を點じて生き存へなければならぬ。嗚呼併し暗き否定の底にも洞穴に忍び寄る潮の如く微かににじみ來る肯定の心よ。思ひがけもなく、ひそやかに、ほのかに、夕月の光の如く疑惑の森に匂ひ來る肯定の歡喜よ、此悲しき中にも温なる思は、強暴なる肯定者に奪はれて、獨り脆弱なる否定者にのみ惠まるゝ人生の味であらう。

2

余は自覺せりと自信することは其自身に於て既に力であるに違ひな

い。併し唯自覺せりと自信する輪廓のみあつて、自覺の内容が渾沌と薄弱とを極めてゐるならば——極めて薄弱なる内容にも極めて強烈なる自信が附隨し得ることを忘れてはならぬ——何の彼等を珍重する迄もなく巢鴨に行きさへすれば、其尤なる者が室と室とを相接して虎視しゐるのである。自覺の價値と眞實とを立證するものは自信に非ずして内容である。力に満ちたる内容である。

自覺することと自覺を發表することとは本來別物である、内容を有することと内容を發表することとも亦本來別物である。併し單に自覺の自信のみを發表して自覺の内容を發表せぬ者が、世間の眼から見て僞豫言者とせらるゝはやむを得ない。發表に價するものは自信に非ずして内容

であるからである。

今の世にも亦自覺せりと稱する者が尠くない。併し少數の謙遜なる自覺者を除けば、彼等の自覺の内容は、余の如き懷疑者の眼から見てさへ氣の毒な程新鮮を缺き緻密を缺き眞實を缺いてゐる。余は無内容なる自覺者の外剛内柔なる態度を見る時先づ微笑し、苦笑する。彼等が猶自ら恥づることを知らずして、野蠻に他人を壓迫する時、余は聲を揚げて嘲笑をさへしてやらうと思ふ。自分にも身邊方寸の霧を照す微光がある。

内容を示せ。内容を示せ。

3

ダンテは自分の罪は傲慢と羨望とに在ると云つたと聞く。余の罪も亦

傲慢と羨望プライド エンブイとにあるらしい。力に於てダンテに似ずして罪に於てダンテに似るは余の悲哀である。

4

獨創を誇るは多くの場合に於いて最も悪き意味に於ける無學者の一人よがりである。古人及び今人の思想と生活とに對して廣き智識と深き理解と公平なる同情とを有する者は、到る處に自己に類似して而も自己を凌駕する思想と生活とに逢着するが故に、廉價なる獨創の誇を振翳さない。古人及び今人に美しき先蹤あるを知らずして、古き思想を新しき獨創として誇説する無學者の姿程醜くも慘ましくも滑稽なるものは尠い。

⑥自分の生活と思想とを獨得にせむが爲に古人及び今人と共通なる内容

を驅逐するは、吾人の生活を極端に貧くすることである。ブラトリー、ポーロ、オーガスチン、聖フランシス、スピノーザ、カント、ゲーテ、シヨールペンハワー、ニイチエ、ロダン等の思想と生活とを拒んで吾人は如何なる新生活を獨創す可きであるか。

机上の萬葉集をこる。「朝に行く雁の鳴く音は吾が如く物思へかも聲の悲しき」と云ふ歌の思ひは明治の今日に於いて更に歌ひ返す可き社會的必要のない歌であらう。萬葉歌人の歌の内容を其儘に歌ひ返すことは明治の歌人の恥辱であらう。併し歌ふ必要のないことも經驗する必要はある。此歌の思ひを沁々と身に覺える事が出来ないことは如何なる世に於いても其人の生活の缺陷である。一度書き表されたことは其物が失はれ

ぬ限り再び書き返す必要がない。一度發見せられたる眞實は凡ての時に渡りて凡ての人の胸に噛み締められることを要する。獨創を急ぐは發表にのみ生きる者の卑しさである。

自己の生活を自然に發展せしめ行く間に、先人及び今人の經驗に逢着して「此處だな」と膝を打つ場合がある。彼等と同感して其の眞意義に悟入する場合がある。此等は凡て自己にとりて新なる獲得であつて決して模倣ではない。

自己の中に他人と異なる性格があり、現代に他の時代と異なる要求がある限り、吾人は先人及び他人と異なる者とならずにはゐない。強ひて自己を他人と異なる者にしやうとする努力は人生の外道に過ぎない。商賣人の

成功策に過ぎない。此努力が如何に其人を高處に押し進めても、其人の生活には必ず人生の至醇なる味に接觸し得ざる一味の空虚があるに違ひない。

自己を壓迫し強制するものとして先人の經驗は悪しき「型」である。自己の望んで得ざる處を實現せるものとして、自己の進撃せむとする方向を標示するものとして、先人の經驗はいとよき型である。吾人は悪しき型を蹂躪すると共によき型を崇敬することを知らなければならぬ。先人が經驗して吾人が未だ經驗せざる處、古人が残し置きたる經驗にして吾人の悟入を要する處——吾人の前には如何にいとよき型の多いことであらう。吾等は此等のいとよき型の前に眞正の謙遜と敬虔とを學ばなければ

ばならぬ。悟入と模倣と一致と追隨とを區別するは極めてデリケートな問題である。

余は他人と區別する爲めの獨創を求めずして、唯生活の中核に徹するの眞實を求め。余は先人及び今人と一致することを恥ぢずして寧ろ內的必然を離れたる珍説を恥とする。

5

心の内に皮肉なる者の聲が聞える——汝の思想と生活とが先人及び今人と共通することの恥辱に非るは既に之を領す。汝の發表する思想と生活とが古人及び今人の思想と生活とに比して何の特色もなくば、何處に存在の理由があるか。

余は此詰問に對して答ふる所以を知らない。無學にして懶惰なる余は、余の思想と生活とが如何に古人及び今人と一致し、如何に古人及び今人と異なるかを判定するの力をすら持つてゐない。唯余の云ふ處が古人の云ふ處と何の異なる處がない場合に於いても、余自身の生命を裏付けて再び之を繰返す處に微かなる満足を感じる丈である。

(七月八日午前)

十、蚊帳

1

蚊帳は艶なもの、悲しいもの、親味の深い懐しいものである。木綿の蚊帳はあの手觸りのへなく、な處から、あの安つばい褪め易い青色まで、如何にも貧乏らしくて情ないが、麻の蚊帳の古い錦繪に見る様な青色や、打たての生蕎麥の様なシャリ／＼した手觸りや、絹の蚊帳の軽い、滑かな、涼しい視覚觸覚など、蚊帳其者の感じが既に夏らしく爽かな氣分を誘つて来る。更に之を人事と聯關させて來ると蚊帳の齎す情調は随分複雑に豊富になる。中形の浴衣に淡紅色の扱帯しどけなく、か細く白い腕もあ

らには、鬢のほつれ毛を揺上げてゐる姿が、青い蚊帳の中に幽かに透いて見える場合もあらう。病人の蒼白い額にフツ／＼と浮ぶ汗の玉を蚊帳越しに覗いて見る痛ましい夜もあらう。幽霊は蚊帳の中には這入れないから、恨めしい人の寐姿を睨み乍ら夜通し蚊帳のぐるりを廻ると云ふ。雷よけの晝蚊帳は加賀鳶梅吉の女房にあらぬ濡衣をも着せた。蚊帳と云ふ青い者は悽い上にも色つぼく夏の生活を彩つてゐる。

2

一つ蚊帳に寝ることは一つ部屋に寝ると云ふよりも遙かに對手との親みを深くする。久しぶりで逢つた友達でも、廣い部屋に離れ／＼に寝るよりは、小さい蚊帳の中に枕を並べて、互の汗の香を嗅ぎ乍ら寝苦しい一

夜を明した方が、どの位思出の色が濃いことであらう。野と衢とは人と人との住む處として餘りに惶しく、餘りに空漠である。人と人との魂の距離を縮める爲に人の家はある。更に其距離を近くせんが爲に人の住む部屋はある。人の住む部屋の中に一區を割して、人と人との魂の呼吸を最も親密に相通はしむる者は夏の夜の蚊帳である。

3

夜遅く外から歸つて自分の居間に通る。細目に點けてあるランプの光が青い蚊帳にうつてゐるのを見る時の心持。蚊帳の中に幽かな寢息をきく時の心持。

4

母親は添乳の手枕を離れて、乳房を懷の中にかくし乍ら、スヤ／＼と眠てゐる子の上にソツと枕蝸をかける。女性獨得の世界と女性獨得の幸福が涙を誘ふ柔かさを以て男の想像の世界に迫つて来る。

5

自分は田舎で育つた。田舎では大抵の家に土藏があつて、蚊帳などは秋の初から翌る年の夏が来る迄土藏の隅に押し込められてゐる。下水の子子がそろ／＼蚊になり出す頃に、祖母は屹度土藏に蚊帳を取出しに行く。根附の様に祖母のあとを追廻してゐた自分はよく土藏の中に隨いて行つたものであつた。藏の二階の薄暗い隅から幽かに呻り乍ら飛び出す二二三の晝蚊の羽音と、一年目に日の目を見る蚊帳の古臭い臭とは、自分の

幼い頭にどんなに入梅の豫感を刻み込んだ事であらう。今でも入梅を思ふと、あの音とあの臭とが幽かに浮んで来る。

6

秋になつて蚊帳を釣らなくなつた晩の廣さ、淋しさ、うそ寒さも亦忘れることが出来ない。北の國では蚊帳の釣手の獨り残る頃にはもう機織蟲が壁に来て鳴く。細めたランプの光を暗く浴び乍ら、蒲團の中に秋らしく小さくくるまつて、機織蟲の歌をきいて寝た頃の心持は未だにあり／＼と意識の奥に浮んで来る。初めて蚊帳を釣らなくなつた晩に沁々物懐しく秋になつたなど感じたあの心持——あの鮮かな、青く澄んだ、ふつくらした感覺をもう一度取返して、自然のあはれをつく／＼味ふこと

が出来たら、それ以來積んで来た一切の経験と知識とを代償とするに何の未練もない。

十一、別れの時

1

ニイチエは屢々「別れの時」と言ふ言葉を使つた。彼の超人は一面から云へば幾度か「別れの時」を経過し來れる孤獨寂寥の人である。私はツアラトウストラを讀む毎に、此「別れの時」と云ふ言葉の含蓄に撃たれる。ニイチエ自身も亦「別れの時」を重ねたる悲しき經驗を有し、「別れの時」の悲哀と憂愁と溫柔と縹緲とに對する微細なる感覺を持つてゐたに違ひない。其極愛せる祖母の死は早くも彼に「別れの時」の切なさを教へた。後年ワグネル及び其徒と背き去つた事が如何に深刻なる「別れの時」の悲哀

を彼の腦裡に刻み込んだかは今更繰返す迄もないことである。彼の思想は彼の生活の寂寞を犠牲として購はれたる高價なる「必然」であつた。此故に私は彼の思想の眞實を信じ、此故に私は彼の人格の純潔と多感とを懐しむのである。

概括せる斷言は私の憚る處であるが、私の心臓の嘔く處を何等の論理的反省なしに發言することを許されるならば、「別れの時」の感情はあらゆる眞正の進歩と革命とに缺く可らざる主觀的反映の一面である。あらゆる革命と進歩とに深沈の趣を與へて、其眞實を立證する唯一の標識である。「別れの時」の悲哀を伴はざる革命と進歩とは虚偽か誇張か銜耀か、孰れにしても内的必然を缺く浮氣の沙汰とよりは思ひ難いのである。再び

一己の感情に形而上學的背景を與へることを許されるならば、恐くは世界及び人生の進化は一面に於いて必然に悲壯の要素を含蓄するからであらう。宇宙及び人生を此の如く觀、此の如く感ずる點に於いてはイブセも亦吾人の味方である。

進む者は別れなければならぬ。而も人が自ら進まむが爲に別離を告ぐるを要する處は——自らの後に棄て去るを要する處は——曾て自分にとつて生命の如く貴く、戀人の如く懐しかつたものでなければならぬ。凡そ進歩は唯別るゝを敢てし、棄て去るを敢てする點に於いてのみ可能である。曾て貴く、懐しかつたものに別離を告るに非れば、新に貴く、懐しき者を享受することが出来ない。新に生命を攫む者は過去の生命を殺さ

なければならぬ。真正に進化する者に、どうして「別れの時」の悲哀なきを得やう。思へば此の如くにして進化する人間の運命は悲しい。「別れの時」の悲哀に堪へぬ爲に進化を拒み過去の生命に執着する卑怯未練の魄も、其情愛の濃かに心情の柔かなる點を察すれば、亦憎くないと云はなければならぬ。

凡ての個人と等しく凡ての文明にも亦別れの時が来る。敢て之を乗り切ると逡巡して進化を拒むとの執れを問はず、兎に角に別れの時は襲ひ來らなければならぬ。客觀的に見て日本の文明が「別れの時」に臨んでゐることは萬人の等しく認むる處である。然るに「別れの時」の感覺が痛切に人々の主觀を襲つて來ないのは何故であらう。

今の世に「新しい人」を以て自任する人は多い。一方に「過去」を理想として現實を呪ふ人も亦次第に其數を増して來る有様である。併し所謂「新しい人」は果して過去の餘影を留めざる全然新しき人であらうか。所謂國民精神の擁護者も亦果して古代理想を一身に體現し盡した人であらうか。私の見る處では、此の如きは兩者共に殆ど絶無に近い。事實上彼等は共に半ば新しく半ば舊き、不可思議なる混血兒であつて、唯理想上或は新に赴き或は舊に傾向するに過ないのである。従つて新と舊との戦は敢て社會一般に投影する迄もなく、彼等自身の中に其慘憺たる姿を現じなければならぬ筈である。然るに、何事ぞ事實は之に反して、所謂「新しき人」は全然自ら與り知らぬ者の如くに舊を嘲り、所謂「國民精神の擁護者」は

暴君の如き權威と自信と——並びに無知とを以て新を難じてゐる。此の如きは未だ問題を其燒點に持來すことを知らざる無自覺の閑葛藤であつて、哲學的に云へば未だ真正に「別れの時」の問題に觸れざる者である。「別れの時」の感覺が痛切に各人の主觀に迫り來らざるも固より當然と云はなければならぬ。「別れの時」の感覺を伴はざるが故に、保守と急進との理想は日本文明に於いて未だ決然たる對立を形成してゐない。「別れの時」の感覺は保守と急進との間に一味心情の交感を與へる、同時に避く可らざる抗争の悲壯なる自覺を與へる。

所謂「新しき人」は先づ自己の中に在りて「舊」の如何に貴きかを見よ。見て而して之を否定せよ。「別れの時」の悲哀を力として却て更に強く「新

を肯定するの寂寥に堪へよ。所謂「保守」の士は先づ自己に感染して強健なる過去の本能を侵蝕せむとする「新」の前に恥ぢ且つ恐れよ。別離に堪へざるの濃情を以て強く「舊」を保持し、烈しく「新」を反撥せよ。此の如くにして兩者の思想に始めて眞實と悲壯と深刻とがあるであらう。

2

他人の爲に自らの身を殺し得る人の心情は尊い。他人の生活を直ちに自己の生活の内容として、其人の死によりて直ちに自己の生活の中心義を奪はれたと感ずる程、深く他人を愛し、深く他人の魂と相結ぶことを得る人の心情は羨しさの限りである。眞正に愛を解し、眞正に他人と自己との融合を経験するを得る純潔高貴なる魂にして、始めて他人の死を悲

みて自刃するを得るのである。私は此高貴なる魂の前に、眞正に他人との融合を経験し得ず、純粹に個我を離れたる愛情に一身を托するを得ざる自分の矮少なる姿を恥ぢざるを得ない。少くとも純一なる主義、純一なる力を以て自己の生活を一貫するを得ざる自らの迷妄を恥ぢざるを得ない。戀愛の爲に殉する人も、君主の爲に殉する人も、自分の不純を鞭つに於いては二致あるを感じないのである。

私は乃木大將の自殺が純粹の殉死であるか否かを知らない。又假令純粹に殉死であるとしても、其道義的意義が客觀的に情死者と同一であると思ふ者ではない。唯若し大將の自殺に少くとも殉死の一面があるならば、其殉死には情死者と共通なる「人として」の美はしさあることを感

する丈である。其殉死には誠實と純潔との不滅の教訓あることを感ずる丈である。而して私が此意味に於て深く大將の死に動かされたことを告白する丈である。

更に人をして其別離の情に殉せしむる所以の對象が殉死者の私情我慾と相渉る事少ければ少ない程、殉死者の愛情は少くとも一層珍貴となり、稀有となり、哲學的となる。此意味に於て君主に殉する者の心情が戀愛に殉する者の心情に比して獨得の意義を有し、特異の印象を與へ、特異の感化を及ぼすことは云ふ迄もない。吾人は大將の殉死によりて純潔と無我との教訓に接するのみならず、又特異なる愛情の實例を示された。私は人間心理の研究者として此特殊にして恐くは次第に滅び行く可き現象に對して格段の興味を感ぜざるを得ない。大將の自殺は他人の愛情に殉する者の一般的關係を離れて猶一層深き問題を吾人の前に提出する。其問題は一面にトルストイの「他人に仕ふる生活」と共通の問題である、一面に社會と國家と、民衆と君主と、高調の方面を異にする點に於いてトルストイの立脚地と對立する。大將が其死後に遺したる此問題は一般國民の問題たること云ふ迄もないが、特に公的生活によりて榮達し、公的生活によりて私情私慾の満足を図る人にとりて最も痛切なる問題であらう。大將の自殺によりて彼等の胸中に幾分なりとも不安の影が宿つたならば、私は彼等に與へたる不安の故に、大將の死に向つて感謝せざるを得ない。

私は大將自刃の動機と問題とに就いて如上の感想を抱く。大將自殺の客觀的意義と、大將の信奉せる武士道とに就いては、茲に輕卒なる感想を語ることを好まない。唯火を賭るよりも明かなるは大將の死が此の如き客觀的方面にも種々の問題を残してゐることである。而して此方面に於いて自由討究を試みるは國賊でも非國民でもないことである。日本將來の文明を如何にす可きかは至難にして至重なる問題である。乃木大將の悲壯なる死を以てするも此問題に鐵案を下して、反對者を強ひるの權利なきは云ふ迄もない。私は此點に就いて倫理學者並に社會學者の慎重なる審議を希望する。私は唯人間の行動並に心理に對して其內的意義を考ふることを喜ぶ。

理想主義の人にとつて「ある事」は無意義にして、意義あるは唯「ある可き事」である。彼にとつて事實とは「ある事」に非ずして「ある可き事」である。此の如き主義及び教養の結果、「ある可き事」に關係すること少き或種の「ある事」は無に等しくなる。「ある可き事」のみを念頭に置くが故に「ある可らずして而もある事」は次第に意識より消えて、自然に自己を擧げて「ある可き事」のみを以て充された人となるのである。彼等の世界は凡て意識と條理とである。彼等は此意識と條理との世界に於て純潔に健全に感激に満ちたる充實の生活をする事が出来るのである。

乃木大將は旅順に其二愛兒を失つた。又大將は明治末期の時勢に就い

て頗る慷慨の情を抱いてゐたこの事である。此二事を根據として推測すれば大將晩年の心情には頗る寂寞の影なきを得なかつたであらう。武士の條理に明かなる大將が此寂寞の故に自殺したのでないことは云ふ迄もない。併し此寂寞の情が無意識に大將を動かして自殺の氣分を助成したことは必ずしもないとは云はれまい。假に此の如き心理作用が意識の奥に働いてゐたとしても、大將は之を意識の明るみに牽出して自ら解剖する様な必要は寸毫も感じなかつたであらう。徹頭徹尾殉死、若しくは責任を果すの死と信じて、透明なる意識と幸福なる道義的自覺とを以て自及し得たであらう。而も此間に寸毫も虚偽と粉飾との痕を留めざるは大將が完全なる理想主義の人であつたからである。理想主義が其人格とな

つてゐたからである。

吾人は屢々吾人の周圍に墮落せる理想主義の老人を見る。「ある可き事」と「ある事」との中間に迷ひて「ある可らずしてある事」を意識し乍ら、之を粉飾し抹塗する老人を見る。吾人は此の如き老人に毒せられて、理想主義其物を輕蔑するに馴れた。然るに今乃木大將は吾人の爲に理想主義の崇高なるものを示された。人間心理の研究者として、吾人は此稀有にして恐くは將來益々減少し行く可き實例に對して茲にも亦深き興味を感ぜざるを得ない。私は凡ての事件と行動とに就て其内的意義を觀察するを喜ぶ者である。

(十月六日)

十二、影の人

1

俺は茲に一生の秘密を書きつける。俺の名は實は青田三太郎と云ふのではない。俺の親達は俺に瀬川菊之丞と云ふ美しい名前をつけて呉れたのだ。併し段々成長するに従つて此美しい名前は俺の御荷物になつて來た。俺は此クラツシカルな美しい名前を護る爲に手も足も出ない達磨大師になつて了つた。俺の生活は正しく、嚴肅に、世間の眼から見えて一點の非の打ち處もない生活であつた。併し同時に俺の生活の内容は、空しい、貧しい、仔の成長して了つた後の蜂の巢のやうなものであつた。俺の靈

は繼母の爲に糧を斷られた小兒の様に、日毎に青ざめて、瘦せ衰へて來た。其處で俺は神様に哀求して、メタモルフオゼ轉身の秘蹟を行つて貰つた。世間の奴は俺の前身を知らないが俺が青田三太郎となつたのは其時からである。瀬川菊之丞が青田三太郎となつたのは、表面から見れば、下情に通ずることを求める爲めに、殿様が襤褸を着て御孤になつた趣があるとも云へやう。併し魂の方から見れば——之が本當の見方である——廣い世間を喰詰めた無頼漢が、河岸を變へて新しい眞面目な生活を始める爲に僞名をしてゐるのだと見る方が適當である。瀬川菊之丞の名を想出すのは恐ろしい、悲しい。だから俺は今迄自分の意識にさへ此事を秘密にしてゐた。俺は今一期の大事を打明けける様におどろししながら此事を自分の魂

に嘔くのだ。俺の云ひ様が巫山戯てゐると云ふ人があるならば夫は巫山戯なければこんなことは云へないからだ。我魂よ、君は戀人を口説く前に酒を飲む男を卑怯だと許り貶して了ふ氣なのか。

菊之丞は三太郎になると共に思ひ切り「悪い子」になつてやらうと思つてゐた。苟も靈の糧となつて之を肥すことならば××でも×××でも何でもやつつけてやらうと思つてゐた。併し轉身の秘蹟を行ふ時に神様の火が弱過ぎたと見えて、菊之丞の性質が未だ焼き盡されずに三太郎の中に残つてゐた。菊之丞の最悪い性質——いゝ子で通さうと云ふ性質——を三太郎も亦承繼いでゐた。三太郎は新しい周圍の中に立つて、脆くも亦いゝ子になりたいと云ふ希望を起した。三太郎は××も×××も出來

なかつた。彼は今新しい社會に立つて、再び手も足も出ぬ達磨大師に收らむとしつゝある。三太郎は之を苦しいと思つてゐる。

尤も三太郎は菊之丞時代に比べれば少しは自由になつてゐる。菊之丞は學校に在つて論理學の成績の拔群な子供であつた。菊之丞の推論に誤りがないと云ふのではない。彼は時々随分見當違ひの推論をしては自分でも苦笑してゐた。併し彼は不思議に論理學のエッセンスを攫んだ子であつた。論理的氣分と云ふ様なものゝ強いであつた。一言で云つて了へば彼にはコンゼクエツツを要求する氣分が随分濃厚に働いてゐたのである。論理學の教師は菊之丞の此性質を見抜いて之を可愛がつた。併し此性質は決して菊之丞の幸福ではなかつた。彼は此性質の爲に自分の思想

行動經驗氣分を検査して一々其コンゼクエンツを討さなければ氣がすまなかつた。そうして其コンゼクエンツを検査することは常にインコンゼクエンツを發見する結果に終つた。さうしてインコンゼクエンツに堪ざる彼にとつてインコンゼクエンツを發見することは同時に其生活に空虚を拵へることであつた。若くは我と我身の自由に束縛を加へることであつた——轉身の秘蹟を行ふ時、神様の火が菊之丞の此性質を可なり燒盡したのは事實である。三太郎は其時の氣分次第で勝手に物を云つたり身を處したりすることが可成の程度迄出来る様になつた。神々の火は三太郎に新しい信念を吹込んだ。三太郎は其時の心持にさへ詐りがなくばそれは自分にとつて常に眞實であると信する様になつた。論理的不一

貫も人格的一貫を妨げるに足りないと思ふ様になつた。それで三太郎は可なり矛盾した事を平氣で云つたりしたりすることが出来るやうになつたのである。菊之丞としては出来ないことが三太郎として出来るやうになつたのである。——併し之は縛の繩が少し緩んだ位に過ぎない。

三太郎は更に一層の自由を望んでゐる。

要するに三太郎は又自分の存在に苦み出した。三太郎はもつと氣紛れに物を云ひ、もつと氣まぐれに身を處することを切に望んでゐる。俺は更に神々に轉身の秘蹟を要求して阿呆の三五郎——我が魂よ、君は僕と一處に昇之助の紙治内を聽いた筈だ。何卒昇之助の調子で此の固有名詞を發音して呉れ給へ——と改名したくなつた。しかし轉身は神々から降

る恩寵である。三太郎の哀求は唯降神を求めるとインブケーションに過ぎない。幸ひにして三太郎には幻想の力がある。幻想によつて三五郎となることは三太郎の自由である。世間の物質論者から見れば三五郎は三太郎の頭の中の影に過ぎないであらう。併し三五郎は唯三太郎から物質と社會と論理との束縛を解き去つたといふ意味に於いて影となつたのである。現實は假相である。真相は唯影の如く其奥に搖曳する。影となると云ふことは外面を擺脫して内面のみに生きると云ふことならば、影となることは人間の哲學的要求である。三五郎は三太郎の影として三太郎のなし得ざる所をなし、發表し得ざる所を發表し、經驗し得ざる處を經驗する。三五郎は益々人生の間に惡を行つて靈の糧を其處に求めやう。三五

郎は益々其場限りのことを云つて辻褄の合はぬ出鱈目を並べやう。世間には自分の魂の爲めに善であり乍ら、他人を傷ける爲に惡とされる「惡」が多い。人の心には論理に於て統一なくして魂に於いて統一ある矛盾が多い。此惡と此矛盾とを經驗するは影の人三五郎の役目である。

2

アガトンの家の饗宴に臨んで洒落者アリストファネスのした卓上演説は不思議に俺の頭に忘れ難い印象を残してゐる。彼の説に従へば其昔人間には「男」と「女」と「男女」との三種類があつた。彼等は腹背兩面に其「性」の機關を持つた圓い存在であつた。彼等は甚だ強かつた。彼等は其力を恃んで「天」を征服することを企てた。諸神は之を知つて大に驚き彼等の驕

慢を罰するが爲に人間を真中から梨子割りにして其力を分ち、更に永久に其罪を記憶せしめむが爲に、其顔を半廻轉して其切り割かれたる部分（現今の所謂腹）が常に其眼の前に見える様にした。此の如くにして二分せられたる人は其半身を求めて哀泣し彷徨した。偶々相邂逅すれば緊く相抱擁して何時迄も離れることを欲しなかつた。其爲に彼等は遂に飢餓と運動不足との爲に相踵いで死亡した。ツオイスは之を見て憐みを垂れ從來背部に残つてゐた性の機關を前に移して、抱擁は繁殖を來し、少くとも一つになることによりて相互の慰藉を得る様にしてやつた。人間の戀愛は分たれたる半身を求むるの憧憬である。男が女を求め、女が男を慕ふは即ち前生に「男女」であつたものである。女が女を、男が男を求める

のは即ち前生に「女」又は「男」であつた者の半身である。彼を自然とし此を不自然とするは論者の誤謬である。孰れにしても其半身を求める憧憬に二致がないから――

凡ての深入りした經驗は世界の光景の全然一變する刹那を經過するに違ひない。此刹那に於いては道端の石塊も俄然として光を發する。個物は象徴となり、現實は幻影となり、夢幻は實在となる。此の如き刹那は固より吾人にとつて甚だ稀に許さるゝ刹那である。併し此高められたる世界の一瞥が尊いか現在日常の生活の明確なる意識が尊いかは疑問である。少くとも彼に許さるゝ歡喜と充實と福祉との意識は此に許されない。若し此甚だ稀に許さるゝ刹那を永續せしめ、又は頻繁にすることが出來

るならば、自分は現實の「眞」に生きるよりも、高められたる世界の「夢」に生きたい。

此高められたる世界に生きる時に、吾人の立脚地は自ら自然的科學的の立場を離れて宗教的神秘的の立場に移る。其刹那の經驗が宗教的神秘的の性質を帯びて來るからである。自然的科學的の立場がぐるりと其姿を代へて神秘的形而上學的の立場に變る刹那の經驗を持たない者は氣の毒である。甚だ稀有ながら此刹那の餘光を身に浴びて、魂の躍りを直接に胸に覺えることが出来る自分は幸福であつた。

「兩性」の生活に於いても此形而上的轉換を經驗し得た人は、換言すれば永遠の *Zweigeschlecht* を刹那に經驗し得た人は、此刹那の經驗を説明す

るものとしてアリストファネスの神話的假説を笑はないであらう。彼の假説には笑つてすまますことの出来ない程嚴肅な——而も悲壯な——心の經驗が含まれてゐる。

此廣き宇宙の間に離れぐに投げ込まれた二片の運命を考へて見る。處女の美しさと頬の紅味とに輝いて、幸福に其半身の尋ね來るのを待つてゐる者は蓋し稀有であらう。其或者は父母の命する儘に靈魂の上の他人に其身を任せて、日毎に心の底に囁く空虚の訴へに戰慄し乍ら、罪と破滅との蔭に微かに其半身の近き來る跽音を待設けてゐる。其或者は眼と血とに欺かれたる抱擁の熱の次第に醒めて行く淋しさに始めて其前半身に對する切なる憧憬を感ずる。其或者は友人若くは友人の妻として我知

らす深くなり行く親みに前世の因果の怪しく現在に働きかけて居ることを覺つて身慄ひする。其或者は其半身に廻りあはぬ間に空しく死んで了つてゐる。

されば此等の半身の邂逅は多く「罪」の名に於いて、「裏切り」の名に於いて、「不幸」の名に於いて果されるのである。假りの契りにも馴染はある。多年の共棲に對する温かき回想も、捨て、行く人に對する切なき哀憐も、魂の他人と共に産んだ子の運命に對する心痛も、互の額に刻まる、「姦淫」の烙印も、乃至相互に異性の第一印象を他人によりて印刻せられたる悔恨も——此等は凡て割かれたる半身が再び一つになる爲の租税となるのである。

併し一切の暗き影にも拘らず、アリストファネスの假説は樂天的である、其世界では何處かに自分を待つてゐる半身がある。死も猶其記憶と回想とを奪ふことの出来ない半身がある。凡ての彷徨は唯其半身と邂逅する迄の假の姿である。

併し若し此半身が何處にも存在しなかつたなら……。若し常に新鮮なる戀愛の恍惚境^{ツイエ}に居らむが爲には、永遠に戀人から戀人に移らなければならぬものとしたなら……。若し次から次に別れを告げることが虚偽を許さざる兩性生活の形式であるとしたなら……。若し無限の彷徨が本來の面目であるとしたなら……。

(十一月廿五日)

十三、三五郎の詩

1

ある朝、

眼を開けば、近眼の眼に、
波立つて見える障子の棧。
眼を閉ずれば眼瞼の奥に
渦巻き流れる異形の色。
世界よ、暫くチツとしてゐろ、
心の火よ、無闇にチラ／＼動くな。

あはれ、しづけさよ。魂の悲しきふるさとよ。
精霊の如く來りて、我が神経を空色の中に包めよ。

2

三五郎は森の中に住めり。一日心寂しさに森を出で、市内の電車に乗り、電車の中にて鼻紙に書きつけたる歌。
電車待つ間の五分間の長さよ。
飯を食ひ乍ら食卓の上に
新聞を乗せて讀む心惶しさよ。
心よ、心よ、あはれ我が心よ、
汝の忙しげに求むるものは何ぞ。

乞食の子の如く、はきだめの隅に
芋のきれはしをあさる心よ。
冷き疊の上にいざたなくねそべりて、
時々ビク／＼と手と足との先を動かす心よ。

3

同じく

心の隅の穴よ、北風の隠家よ。
貴様は又ビュー／＼やり出さうとしてゐやがるな——
此豫感する心の冷さと
美學一卷を讀み了へたる後の疲れと。

4

同じく

やい、「重壓の精」奴、
ごげやい、
ごげやい、
ごきやアがれやい。
女王様の御通りだぞ。
假令着物は黒くても
顔の色は青ざめても
髪の色は青ざめても
髪の色は青ざめても

踵の音は寂しくても、

女王様は女王様だぞ。

女王様の悲みは

女王様の歡びと

一つに光つてゐらつしやるのだ。

黄金の色は曇つても

氣高い匂ひに二つはない。

貴様は何だ、鉛ぢやないか、

歡びも、悲みも、怒りも、恨みも、

重く、鈍く、光なく、薄汚く、

よぼくど、のろくど、跛り行かしむる

貴様は鉛の精ぢやないか。

御通りなさるは女王様だ。

どけやい、

どけやい、

どきやアがれやい。

ら

同じく

眞向ひには、ほくろが五つある、黄色い女の顔、

其隣りの男の、顎の疣に生えた赤毛は

三四寸のびて、電車の中の風にもそろ／＼と動いてゐやがる。釣草につかまつてゐる小意氣な年増の白粉のたまつてゐる耳の下には真赤な肉の上つてゐる瘰癧の切り痕、臉の上をやけどして片眼の釣上つた男は平面の、顎の四角な、青ぶくれの其連と何か話してはにた／＼笑つてやがる。前の男がちよいとよろければ遠慮なくぶんと來る腋香の臭ひ。

眼をつぶれば我が胸の奥にて、
げえ／＼上げてゐるコロリ病みの心――
外は師走のから風に
どんよりとした空の色。

勝手にしやがれ、畜生め。
死ねアどいつにも用がない。
どうなるものか、あきらめろ。

(十二月一日)

十四、内面的道德

1

自分にとつては自明なことでも社會にとつては自明でないことがある。自分にとつて自明なことは、社會にとつて自明でないこと——此の二つが永久に並存して相互に關係しないものならば問題は無い。併し社會は社會自らにとつて自明ならぬことは凡て許す可らざること、推定する。個人にとつて自明にして、社會にとつて自明ならぬ場合に、個人が自己にとつて自明なる道を進まむとすれば、社會は之に干涉し、社會は之を壓迫する。茲に於いて個人は自明の道を進まむが爲に社會と戦ふ必要

を生ずる。自らの爲に云ふ必要なくして、社會の爲に云はなければならぬ必要に逢着する。自分は之に名けて啓蒙言と云ふ。内面的道德の説は自分の啓蒙言である。

2

道德とは偏に如何に行爲す可きかを教へるものとすれば、換言すれば行爲の規矩準繩を教へるものとすれば、道德の人生に於ける價值は矮小卑劣である。それは精神的生活の末梢に位する、粗大な、外面的な價值を表示するに過ぎない。犬は飯を食ひ、人は飯を食ふ。飯を食ふことは犬と人とを分つに由ない。乞食も兵役に服し、市民も兵役に服する。兵役に服すると兵役に服せざるとは乞食と市民とを分つに由ない。大奸も遜

り聖者も遜る。遜ると否とは大奸と聖者とを分つに由ない。飯を食ふことによつて價値を判すれば犬と人とは價値を等しくする。兵役に服することを以て價値を判すれば乞食と市民とは價値を等しくする。遜ることを以て價値を判すれば、大奸と聖者とは價値を等しくする。外面的道德も亦此の如き笑ふ可き價値の標準に過ぎない。天と地との如き相違を有する内的生活は、行爲の外形に於いて往々類似の形式をこる。形式を共通する行爲の外貌は往々天と地との如く相異なる内的生活を包藏する。

内的生活の機微を識るものには、不信の内容にも天より地に至る迄の無限の階級がある。姦淫の内容にも西より東迄の無限の間隔がある。不孝の内容にも山から海迄の無数の高低がある。猶友情の内容にも天より

地に至る迄の無限の階級があり、貞操の内容にも西より東迄の無限の間隔があり、孝悌の内容にも山から海迄の無数の高低があると同様である。外面的道德は内面生活無限の風光に與らない。豊富なる、多彩なる、陰影と明暗とに饒かなる精神的價値の世界に與らない。それは唯芋蟲の如く栗のイガを知る。それは偽善者の、商人の、法律書生の、教育者の、老人の、検査官の道德である。彼等はドン・ホアンの罪と電小僧の罪と、エディツプスの罪と御酌を汚す老人の罪との高下を知らない。彼等は盜賊の罪と探偵の罪との美醜を知らない。彼等は失敗者の罪と成功者の罪との善惡を知らない。彼等は善人の罪と罪人の罪との眞偽を知らない。

併し内面生活に生きることを知る者にも亦道德がある。道德は精神的價值の世界に緊張と威嚴と「眞實」とを與へる。内面生活を支配する道德は法律書生の、檢察官の道德とは全然別様の基礎の上に聳える。如何に行爲すべきかは今や枝葉の問題となる。如何なる態度に心を置く可きか、如何に精神を濶歩せしむ可きか、之が最高關心の問題である。精神の高貴、心情の純潔、動機の純粹——之が内面的道德の世界に於いて無比の尊崇を受ける。此の世界に於いては紀伊國小春は盛名ある某貴族夫人の遙に上位に置かれる。衣食の保證を得むが爲に夫に貞操なる者はマダム、ポーバリーの靴の紐を解くことを命せられる。微毒の爲に狂死したモーパッサンは内面道德の天國に在つて、××國大總統×××の地獄に墮つるを快げに瞰下する。ドン・ホアンは選ばれ、御酌の貞操を破る老人は面に唾して豚小屋の中の女豚に交る可く追放せられる。探偵は陰暗の國に困臥して盜賊の輝ける姿を仰視する。

4

外面道德の世界に在つては、潜かに姦淫する者は、自己の姦淫を告白する者を嘲笑し、壓迫し、監督し、危険視するの權利を有する。彼等は偽善といふ外面道德最高の善徳を有するからである。偽善によつて姦淫の暗示と傳染を防ぐからである。併し内面道德の世界から見れば道德的悔恨を以てする者は固より、藝術的誠實を以て其姦淫を告白する者も遙に偽善者の上に置かれる。彼等は少くとも悔恨と誠實との美德を有するか

らである。彼等は自己の眞價値に従つて他人から取扱はれることを恐れない程眞率だからである。彼等は其姦淫から精神的偉大を創造する丈の力を持つてゐるからである。最後に社會と人類とを此精神的創造によつて高貴にするの効果を齎すからである。内面道德の世界には何處にも二重道德を一元的道念の上に置くの論理がない――

5

かう云つたら外面道德の信者は云ふであらう、これはこれ大乘の教説、社會の公衆を導くには外面道德の小乗説を以てするを要すると。彼等の矮小卓吝は遺憾なく此の一言中に暴露されてゐる。内面道德は姦淫を奨励するものに非ずして、姦淫の中にも高貴卑賤の階級あるを説くもので

ある。心情の高潔を説く者に何の危険があらう。汝の外面道德を保持せむとならば、之れを内面道德より流出派生せしめよ。此の外に汝は絶對的に存在の理由を持たない。

6

外面道德の専權は精神を萎縮し窒息せしめる。外面道德の専權は人を野卑陋劣にする。今や法律書生と検査官との道德は白晝公然として街衢を横行し、内面の世界に生きむとする者は彼等の喧噪と惡臭とに堪へない。内面道德の説なきを得ざる所以である。

(元二十五)

十五、生存の疑惑

1

解決されぬ儘に何時の間にか意識の闇に葬られて居た問題は、幾度目かに又俺の心に蘇つて來た。生活と生存と——眞正に生きること、食ふ爲めに働くこと、——の矛盾は又俺の心を惱まし始めた。

吸収と創造とは交錯連続して魂を其往く可き途に導いて行く。創造の熱が鎮靜の悦に代る時、餘裕を得たる魂は快く息つき、身邊を繞つて流れる雰圍氣をば大らかに呼吸する。此の時に當つては世界との接觸も外物との交渉も、魂にとつて何の苦痛でもない。吸収は限りなき悦びであ

る。魂は快活に、肯定的に一切を包容して流れ動く。

併し幾許もなく魂は外物に飽和する。世界は夢と影とに充ち溢れて重苦しく魂を壓迫する。處理を要する問題と展開を要する局面とは魂を未だ知らざる新しき世界に推し進めんとする。茲に於いて醞酵と苦悶と創造との時が押寄せて來る。魂は内に渦巻き溢れるものに集注し沈潜するに専らなるが爲に、外界との接觸に堪へない。内界の動亂に具象の姿を與へる爲に外物に攫みかゝることはあつても、靜かに外物を享樂して之と同化してゐる餘裕がない。心は熱に呻く。その脈搏は高まつて來る。外物の些細なる干涉も、創造の過敏なる神經を攪亂する。

吸収も創造もそれ自らに價值ある生活である。魂は此二つの層の交錯

を通して其終局に——或者はオリンブスの蒼空に、或者は地獄の深みに——急ぐ。併し此二つの層が食ふ爲にする労働——職業——に對する寛容の度には著しい逕庭がある。生活と生存との矛盾は、魂が此二つの層に出入する毎に明滅する。明滅の度に相違はあつても、恐らく此矛盾は魂が肉體と共に在る間永久に人間を悩ますことを止めまい。

吸収は餘裕ある状態である。物と遊ぶ間に自己を活かして行く状態である。従つて此場合には些細の讓歩を以て——若くは自己を活かす途そのまゝに、職業と調和することが出来る。外物と應接して倦まざる心は、或特定の外物と應接するにも、特殊の苦惱を感ずること少きを原則とする。固より全然内界に共鳴を喚起し得ざる事物は、魂に倦怠と苦痛とを

感じさせるであらう。併し吸収の状態に在る時、魂は極めて多數の事物と共鳴し得る。魂はその共鳴を感ずる事物の間にも、肉體を支へるに足るだけの職業を發見し得る筈である。

之に反して創造の要求はあらゆる經濟的活動と矛盾する。創造の熱に悩む心は其時間の一部分を割いて職業に與へることを欲しない。創造の活動の中絶する經濟的活動は常に創造の熱を冷却する。創造の成果が偶然に或經濟的報酬を齎すことはあつても、經濟的報酬の要求と豫想とは常に創造の作用を不純にする。魂が醗酵し苦悶して内界に何等かの建設を試みる時、職業の強制は腸をかきむしる程の苦しさを以て魂の世界を攪亂する。

俺の心には常に創造の要求がある。魂の底に潜む一種の不安は常に静かなる外物の享樂を妨げてゐる。本を讀み乍ら、人と話し乍ら、外を歩き乍ら、酒を飲み乍ら、俺の心は常に最深の問題を胡魔化してゐる様な不安を感じる。道草を喰つてゐるのだと云ふ意識は常に當面の經驗に没頭することを妨げてゐる。従つて俺には本當に我を忘れた朗かな吸収の時期がない。併し創造の脈搏緩かな時、俺は外物と應接することによつて紛れることが出来る。大なる苦痛なしに職業の人となることが出来る。

然るに運命は今俺の内面生活を危機クライシスに導いた。死と愛との姿は今眼について離れない。内界の平衡は著しく傾いて、此儘にしてはゐられないと云ふ意識は強く俺の魂をゆすぶる。俺の心は今此意識に面して顛倒し

てゐる。俺は苦しい。俺は此問題に對して正面からぶつつかつて行きたい。俺は今創造の熱に燃えてゐる。今一息押して行けば忽然として新しい世界が現前しさうだ。固より俺の創造は例によつて否定に向つてゐる。併し凡ての決然たる否定は常に積極的の創造である以上、何處に否定を恐れるの理由があらう。俺には此儘にしてはゐられないと云ふ心がある。此心を押しつめた處に、何等かの形で新しい世界が開けて來ない譯はないと思ふ。

併し此創造は職業を棄てたる專念を要求する。さうして何時迄かゝると云ふ時間の豫約をして呉れない。然るに俺は貧乏人である。俺には借金があつても貯金はない。勞働をやめると共に俺は食料に窮する。のみ

ならず病弱の母は藥餌の料に窮し、知識の渴望に輝く弟は學資に窮する。俺の創造は、俺の眞正の生活は、俺の今に迫る内部の必然は、俺の生存と矛盾する。母の健康と矛盾する。弟の前途と矛盾する。飛躍を要求する魂と、魂の翼を束縛する骨肉の愛と——俺は此矛盾をどうすればいいのだらう。

忽然として頭の中に一つの聲が響いて來た。其聲は非難する様な調子で俺の魂に囁く。——お前がどうしても職業に堪へないならば、母と弟のことは心配するに及ばない。運命は屹度お前に代つて彼等を見守つて呉れるであらう。運命が見守つて呉れないならば、彼等は自分で苦しんで勝手に其途を拓いて行くに違ひない。又お前の肉身を支へる爲には

お前の物質的要求を極小に制限すればいいのだ。お前は貧乏だと云ひ乍ら、必要以上に贅澤してゐる。其贅澤な習慣を拋棄するだけの決心が出來れば、お前は魂の徹底を障碍する様な職業を無理にする必要を感じなくなるであらう。御前が餓死するまでには随分時間がある。其時間を利用してお前の創造に専念してはごうだ。それが出來なければお前の魂は未だ本當に危機に臨んでゐないのだ。お前の心にはまだ職業に堪へるだけの餘裕があるのだ。此の問題にはつきりした解答を與へて見るがいゝ。その上でお前は始めて生活と生存との矛盾を云々するの資格を得るのだ。——

俺の魂には淋しい諦めと謙遜とが浮んで來た。俺が創造の熱に苦しん

でゐることは確かである。併し此熱は俺の愛憐の情を破壊し、俺の生活上の習慣を轉覆し盡す程の力を持つてゐない。生活上の現状維持を根本假定とする以上、俺は職業の間を縫つて、内界の創造を仕上げて行くより仕方がない。創造の熱は職業の虐待に反抗して鬱積するであらう。そうして早晚鬱屈に堪へない爲に爆發するであらう。忍ばれるだけ忍べ。抑へられるだけ抑へよ。魂は劬らなければ育たない——之も一面の眞理である。魂は虐待しなければ育たない——之も一面の眞理である。抑へるに従つて潜熱が増す。魂のいのちは石垣の間に咲く堇の様に、職業に奪はれる心の合間にも育つて行く。職業と魂とを堪へ難い迄に争はせることも亦痛快な一經驗たるを失はない。放つて開かせる時期の來る迄俺は

俺の爆發を抑へて行くのだ。

固より此様に抑へて行けば何時迄經つても爆發する事がないかも知れない。抑へなければ育つ筈のものが、抑へた爲に枯れて死ぬことがあるかも知れない。併し抑へた爲に枯れて死ぬ様な弱いものならば仕方がない。運命は枯れて死ぬことを命じてゐる。枯れて死ぬことを命せられたものは從順に萎れて死んで遣る迄のことだ。

此處に來ると金持は職業の爲に創造の熱を抑へる必要がない。金持を俺の境遇に置けば彼は何の躊躇もなく此迄の仕事を全然抛棄して了ふに違ひない。そうして彼は心の動く儘に本を読み、温泉に行き、旅行をして、自分の魂を劬りながらその問題を育て、行くであらう。問題は育て

られるに従つて育つて行く。彼は進歩した思想と平衡を得た頭とを以て再び東京の生活に歸つて来る。彼にはその醗酵に自然の経過を與へる爲に、生活の様式を一變する必要がない。愛憐の情を傷つけることもなく、物質的要求を抑へることもなく、爾餘のものを否定するの苦痛なしに、彼は素直に、長閑に一大事の肯定に進むことが出来るのである。

併し俺の様な貧乏人はさうは行かない。俺は温泉に行くことも、旅行に出かけることも出来ないから、依然として机に向つて頭の勞働を續けて行く。魂の問題は時々仕事に行惱む頭の中に現れてその進行を妨げる。仕事が捗取らないから癪癢を起す。勞働に妨げられて内から湧く問題を抑へつけるから自分が果敢なくなる。而も怒つたり悲觀したりしてゐる

間に、仕事は兎に角進んで行く。問題も牛の様にノロノロと其歩みを運んで行く。其間に或種類の思想と感情とは芽を吹くか吹かずに闇から闇に葬られる。或種類の思想と感情とは素直な姿を失つてヒネクレて行く。思想の胎兒を流産するの寂しさも、行きたい方に行かずにムヅムヅするの腹立しさも、金持の人は恐らくは(此意味に於いては)知るまい。知ることのよしあしは別問題である。併し運命が金持と貧乏人とを導くに別々の徑路を以てすることだけは争はれない。貧乏人は虐待によつて育つて行く。虐待は彼を天死に導き、又は彼を獨特の成長に導く。

要するに貧乏人の創造は金持よりも酷しい試金石にかけられてゐる。従つて金持が「何物か」になり得る場合にも、貧乏人は「無」で了るかも知れ

ない。併し生育す可き魂にとつては、固より貧乏と金持との差別がある譯はない。

俺は貧乏人だ。俺は職業によつて食つて行かなければならない人間だ。此事を本當に覺悟するのは容易なことではない。未練なる俺の心は時々金持の眞似をしたくなつてフラ／＼となる。併し俺は貧乏人だ。俺の煩はされざる魂の生活は「汝等明日の糧を煩ふ勿れ」といふ言葉の意味を眞正に體得することによつて始まるのだ。此關門を通過するのは容易なことではない。併し「生存の爲の關心」を撥ね退けた方が爾後の生活にとつて無意味に了る譯はない。俺は貧乏人として特殊の發達を遂げなければならぬ苦痛を恨んではいけない。

2

出家とならずに、魂の救を得られるかどうかは疑問である。少くとも俺一人にとつては。

3

生きる爲の職業は魂の生活と一致するものを選ぶことを第一とする。然らざれば全然魂と關係のないことを選んで、職業の量を極小に制限することが賢い方法である。魂を弄び、魂を汚し、魂を賣り、魂を墮落させる職業は最も恐ろしい。

俺は牧師となることを恐れ、教育家となることを恐れ、通俗小説家となることを恐れる。

(大正二年四月廿二日)

十六、個性、藝術、自然

物と物とを差別すると云ふことは、之を永遠に再會することなき並行線に分離させると云ふことではない。デカルトの哲學に於ける物と心との關係の様に、差別される存在と存在とに無限の別離を申渡すことではない。差別された物と物とはまつはり合ひ、からみ合ひ、もつれ合ひ、融けあつて、最後に一つの窈深なるものに歸する。内容に於ける無限の差別は、窈深なる一つの生命を形成する必然的の要素である。差別の豊富を除いて生命の充溢なく、豊富なる差別の認識を豫想せずに、活き、動く

生命の認識は成立たない。私は差別を差別することを知らざるもの——祖先の用ゐられた熟語を用ゐれば、菽麥を辨せざるもの、——所謂「渾一觀」を信することが出来ない。彼等の世界には陰影がない、遞層がない。調和がない。交響がない。従つて又真正の意味の戦闘がない。彼等の世界には唯盲目なる動搖があるのみである。一切を包む夜があるのみである。思ひあがりたる渾沌があるのみである。

生命を、創造を、統一を、強調するは歡迎すべき思潮である。併し此等のものを強調すると稱して、創造の世界に於ける差別の認識を、生命の發動に於ける細部の滲透を、念頭に置かざるが如き無内容の興奮には賛成することが出来ない。否、常に賛成が出来ないばかりではなく、私は彼等

の所謂「生命」、所謂「創造」、所謂「統一」の思想の内面的充實を疑ふ。

2

個性を理解するに個性型 (Individuality type) を以てすることがどれ位の程度まで妥當であるかは問題である。人間を差別するに哲學者政治家等の個性型を以てし、藝術家を差別するに畫家彫刻家建築家文學者音樂家等の個性型を以てすることがどれ位の程度迄妥當であるかは猶更問題である。併し人間の性格に哲學者政治家等に分化し行く可き自然の傾向があり、藝術家の空^{フアンタジー}想に繪畫に據り彫刻に據り建築に據り文學音樂に據らむとする自然の個性があることは争はれない。而して此等の個性型が或程度迄無限なる個性の變化を概括する用をなすに足ることも亦争はれな

い。此限りに於て政治家哲學者畫家彫刻家建築家文學者音樂者等の名は意味のある内容を持つてゐる筈である。然るに輕躁なる「生命崇拜者」は此等の差別の意味をも一笑に附し去らむとしてゐるやうである。

其處に生命があれば必ず個性があることは論者も固より異論のない處であらう。そうして或個性型に屬する個性はその人格開展の方向を——その内界建設の資料を——色と線とにとり、或者は之を量と面とにとり、或者は之を音響にとり、或者は之を思想にとり、或者は之を言語を所縁とする空想^{フアンタジー}にとる。ヘーゲル以來云ひ古した通り、顔料をとるか石塑をとるか樂器をとるか、藝術家の世界に對して——その創造と生命とに對して——決定的の意味を有する事件である。方向の相異はそれぞれの

個性にとつて、生命の必然なるが如く必然である。政治家と哲學者と、音樂者と彫刻家とを内面的に區別するものは實に彼等の生命そのものに内具する特殊の傾向である。個性はその特殊の内面的傾向を最もよく實現する時に最もよく「人」である。従つてマイヨールは彫刻家として最もよく人であり、チャイコフスキーは音樂者として最もよく人であり、セザンヌは畫家として最もよく人である。ロダンが彫刻と共に素描に長じ、カンチンスキーが繪畫を描くと共に詩を作り、ワーグナーが音樂と共に劇詩と評論とを能くする等、近代的天才には精神的事業の諸方面に涉る者次第に多きを加へて來たとは云ふものゝ、彼等と雖も或る特殊なる藝術的性格として、始めて其「人」を實現してゐることは疑はれない。カン

トは哲學者である、そうして音樂者ではない。ルノアールは畫家である、そうして建築家ではない。彼等が哲學者に限られ、畫家に限られてゐることは、彼等の「人」であることに對して決して何の妨げにもならない。否寧ろ彼等は哲學者であり畫家であるが故に始めて「人」なのである。天才は自己を「人」として自覺すると共に「或もの」哲學者音樂家其他として自覺する。彼の「或もの」が——彼の個性を眞正に生かす可き或るエレメントの支配が——彼の「人」の内容だからである。(此「或もの」が此等の個性型の孰にも落付くことが出来ない限りに於いて、吾人は彷徨の「人」であつて哲學者でも藝術家でもない。)

「俺は畫家ではない、人だ」と云ふ言葉は、「畫家の中から「職人」を排斥し

て「生命」を強調する點に於てのみ意味がある。真正に自分の個性を自覺した人が、まごもの言葉を使つて云ふ場合には「俺は畫家として人だ」と云ふ可きである。繪を描く人がその「畫家」を殺して「人」を生さうとするのは、「俺の繪はゼロだ」と云ふに等しい。此の如き自覺の下に描かれた繪畫には、筆觸と色彩と形式と構圖との虐殺があるのみである。戸迷ひのシンボリズムとアレゴリーとがあるのみである。

3

藝術には技巧が必要である。と云ふ意味は資料(顔料、塑土、金石、言語等)の精を完全に掌握することが必要だと云ふ意味である。更に適切に云へば資料の精と空想の精とが神會融合してゐることが必要だと

云ふ意味である。従つて或資料の精を完全に掌握してゐることは必ずしも他の資料を完全に掌握してゐると云ふことにはならない。或資料の中に實現されることを熱慕する空想世界は、往々他の資料を反撥して、その中に實現されることを嫌ふ。故に如何に彫刻の大家と雖も、強ひて顔料を以てその空想を實現することを迫られる場合には、戸迷ひするのに何の不思議もない。彼は彫刻家だが畫家ではないと云ふ言葉は此點に於いてその意味を有するのである。

既に藝術内に於いてさうだとすれば、藝術と思想との間に於いては此間隔が更に甚しいのは當然である。彼は藝術家だが思想家ではないと云つたり、彼は思想家だが藝術家ではないと云つたりするのは決して無意

味な言葉ではない。吾々は一つの部門に於ける強みが直に他の部門に於ける強みではないことを真正に理解して、自己の能力に對する眞實な愛惜と敬虔な謙遜とを持たなければいけない。吾等の「人」として「藝術家」としての眞正の發展は此自覺を基礎として始めて迷はざる途をこるこゝが出来るのである。

固よりかう云ふのはあらゆる藝術的資料の精^{グレイニウス}を掌握し、一切の藝術世界に妥當なる空想を兼有して、その上に思想上の創造にも卓越してゐるやうな偉大なる個性の可能を否定するのではない。又偉大なる藝術家であることが偉大なる思想家であることの一つの資格であり、偉大なる思想家であることが偉大なる藝術家であることの一つの資格である

ことを否認するのでもない。偉大なる藝術家はその豊富な藝術的經驗を以て、思想家に極めて貴重なる材料を供給し、偉大なる思想家はその精神的訓練と哲學的人生觀とを以て深く藝術家を指導するは寧ろ當然のことである。私は唯彫刻家の完成が直ちに、畫家の完成でないことと、藝術家の完成が直ちに思想家の完成でないことを明かにしたのである。此の如くにして彫刻と繪畫と、藝術と哲學との間には差別を生ずる。さうしてその差別の中に、又奥に、大なる「人」の統一が君臨するのである。

4

藝術は創造である。之は疑がない。併し藝術は創造であること云ふこと